

351
256

佐藤乾雄述

記念説教十題

神徳書院藏版



始



特 214
770



說教十題



記念説教十題刊行に就て

回顧すれば去る明治四十年は我教祖現身を神隠させ給ひしより廿五年に相當し當時記念布教の行はるゝや余は管長の命により記念説教十題を選び東京にて十回の開教をなし速記に附したりしが其の後畑擔當屢々該速記録の校訂を求め東京にて刊行せんことを以てせしも公私の事繁く年経るまゝに今日に至れり

今茲諸種の速記録筆記録舊稿等整理中偶々此の速記録出づ恰も本年は教祖五十年祭にて神慮の程も最尊し余神護

によりて長生し此の御年柄を迎ふ言外餘情盡きざるものあり將今昔の感に堪へず今回速記録を閲するに増補訂正を施したき所多しその一例を擧ぐれば今世に行はるゝ御理解を神誠神訓に併せて説明したらんには一層御神意を明になし得たりしならんも此は當時本部に於て蒐集中にて引用するを得ざりしなり「教祖御修行の一端」なる講題中教祖平和の御態度の所に至りて御理解第九節を引用せざれば如何にも徹底せざるものあれば今回それをのみ増補したるが如き是なり然れど又中には今世に行はるゝ御理解と同様なる神語りあるは己教祖生神と金照明神とより

拜承せし事等を擧げたるものなり斯くて重複の嫌ある箇所は訂正せしも其の他は當時講述の趣旨語調を其の儘に存したり此は追懷を新にせん事を期するに共に一は本教々義の發達の次第を見るの参考資料ともなるべきものあればなり當時開教せし教會所中大場芝教會長は明治三十二年に福田横濱教會長は同三十九年に歸幽し外四ヶ所の教會長は何れも健在なりしが今は皆物故し信者亦逝きし者多く茲に廿五年の往時を偲び現状を觀れば轉々推移の跡著しきものありて感慨無量仍ち往時を追懷しつゝ教祖五十年祭記念として是れを刊行すこの上梓や畑宿老の生

前中に成し得たらんにはご思ふの念甚だ切なるものあり
 斯くて余の菲徳教祖生神の御教事を審らに神語り得ざり
 しことの多きを恐るゝものなれども若しそれこの神語り
 にして信心向上の一助ともなるを得ば幸甚之れに過ぎず
 なん

四

昭和八年七月二十二日

佐藤 範雄 誌

目次

一 大天地の眞理は小天地の人に備る	(明治四十年七月一日 畫席於東京教會所)	一頁
一 金光教の人生觀	(明治四十年七月一日 夜席於東京教會所)	二七頁
一 人智は有限	(明治四十年七月二日 畫席於深川教會所)	四五頁
一 神人一致	(明治四十年七月二日 夜席於深川教會所)	六三頁
一 神に聲なし人に口あり	(明治四十年七月三日 畫席於芝教會所)	七九頁
一 信心相傳訓	(明治四十年七月三日 夜席於芝教會所)	一〇一頁
一 精神修養は成功の母	(明治四十年七月五日 畫席於白金教會所)	一二七頁
一 教祖御修行の一端	(明治四十年七月五日 夜席於白金教會所)	一四九頁

一 幸福とは何ぞや
一 死生の安心

（明治四十年七月六日
晝席於日本橋教會所）
（明治四十年七月六日
夜席於日本橋教會所）

一八三頁
二一三頁

大天地の眞理は小天地の人に備る

佐藤範雄述

講題 大天地の眞理は小天地の人に備る

(明治四十年七月一日 東京基督教會所畫)

諸君にも能く御參詣なされました。久々振にて、神語りを致しまする御神縁を蒙りました。只今畑教會長より申述べられた通り、來る十月教祖の神の二十五年記念大祭を行はせらるゝについては、如何にして二十五年の間更に溯れば教祖の神御立教以來蒙り來りました御神徳に對し奉りて御恩報じを致すべきであるか云ふことで、吾々巡教師の任を帯びてをる者それ〴〵巡教を致して居りまするが、本職は本部の用事忙はしく、其の巡教を得致しませぬ。然るどころ今回文

部省の召集により来る十日より中學校長會議がありまして
上京いたすこととなつたについて其の會議の開ける前だけ、
當市内重立つ所の教會と横濱教會とに於て開教せよこの命
を受けました。而も東京市内に於きましても數々ある教會
を僅か五箇所しか本職が開教する時間がありませぬ。他は
片岡巡教師がお傳へする事になつて居ります。加ふるに本
職は昨年五月當市に於て教導いたしました。以來説教といふ
やうな説教は致してをりませぬ。それは暇がないからであ
ります。眞に神語りするには御縁遠くなつて居りましたが、
今日より當市に於て都合十席の神語りを致すこととなり、今
回は講題を前以てお知らせしておきました。當支部より信
者の方々へ配付になつて居る順序に依てお話しする考へて

あるから繰合せられて成り得べくんば續いて聽問せらるゝ
やうに致されたい。又今日は非常に疲勞いたして居りまし
て、今までやすんで居りましたやうなところで、精神甚だ活氣を
失うて居りますから、ユルリ／＼話さうと思ひます。殊に今
日の講題は理窟がましい講題であります。諸君方の心の裡
に、一々物を數へるやうな心持で御聽きになるやうに前以て
願ひ置きます。

今日の講題は
「大天地の眞理は小天地の人に備る」と云ふのであります。
此の大天地に對して人を小天地と申しますが、天地に備つて
居るだけの眞理道理と云ふものは、スツカリ人間に備つて居
るご云ふことを申傳へやうと云ふ意味の講題であります。

此の天地の眞理については、幾百千年の昔から、學者と呼ばれ
徳者と呼ばれた人達が研究し、説き明かさんと心をを用ひたこ
ごであつて、其のやうな人々だけでも、この位あつたか知る事
も出来ない程である。然れども未だ天地の眞理を明かに説
きつくした、悟り盡したと云ふ人もなし、又これから往先に於
きましても、之を説き盡すものはなからうかと思はれます。
其の廣大なる大天地の眞理を不徳菲才にして、殊に一席の説
教に於て語らうとするはおほげなき事と思ふのであります。
が、これは丁度濱の眞砂を見まして、これは眞砂であるといふ
ことは誰の口にも言へますけれども、さて其の眞砂は幾らあ
りや、ご問はれたらば答ふるごが出来ませぬ如く、……併し
是も道理の上から穿鑿してゆくならば、數へ切れぬもので

もありませぬといへども、其の實數へは得られますまい。……
又大空を仰いで羅列して居る星を見て、空に星ありごは言へ
ますけれども、其の星は幾らありやと尋ねたならば、之に答ふ
るごは出来ませぬ如く、大天地の眞理は小天地の人に備る
ごいふ話をしようとするのも、濱の眞砂を見て眞砂あり、大空
を見て星ありご云ふ位なごを御話するに過ぎないのであ
ります。併しながら其の大天地の眞理は我教祖の神の御威
徳によつて、現はれました。其の片端をだに、何うか致して諸
君ご共に一步より一步と進んで、眞理の體驗を深めたいもの
であるご云ふ一念を以て、範雄の信念を語るものであります。
それ故此の大天地の眞理が、貴い人にも賤しい人にも、上なる
人にも下なる人にも、すべて人間ご云ふものには平等に備は

り居るご云ふことが、諸君方の御身に得心できるやうに語る
ことを得ますれば、これは全く教祖の神二十五年祭の御威徳
であるご御互に御禮を申上げたのであります。何故かこ
いへば、我教祖の神が御出現なかりせば、此の範雄が天地の眞
理だなど、語り出る譯はないからである。教祖の神が御出
現遊ばされて、斯の道を傳へ置かせられたが故に、吾々が大天
地の眞理であるの、小天地の道理であるの、言はれるのであ
ります。教祖の神が神上りまして二十五年の今日、こゝに神
語りをするご云ふのも、全く教祖の神の御威徳であるご云ふ
ことを御互に御禮を申上げつゝ、是から神語ります。
さて大天地の眞理ごは如何なる事を云ふのであるか。一
言に申しますれば、大天地に大神靈あり、生々化々の作用行は

れ、萬事萬物皆道に従ふ、その道秩序ありて一絲亂るゝごごな
し、是を大天地の眞理ご云ふのであります。人も亦此の眞理
を承け居るが故に之を小天地ご云ふ。小天地には小神靈あ
りて一身の作用を司り、神の道を人の道ごして居ります。是
を大天地の眞理は小天地の人に備はるご云ふのである。所
が今申述べたごけては決して大天地の眞理が小天地の人た
るものに備つて居るご云ふことがハツキり致さぬごご思
ひます。そこで之については、一々解釋を致しませずして、今
述べました事を相對的に、甲の人ご乙の人ご相對するが如く、
又具體的に眼に見えるが如く申述べ、天地ご人間ごが相對
して、其の大天地の眞理が小天地の人に備はるご云ふことを
明らかにしたいご思ひます。諸君にも、人間は生物であるご

申しましたら、左様であるご御答へになるであらう。又人間は死物であるご申しましても異論はありません。それと同じく、今度は天地は生物である、又天地は死物であるご斯う申述べまして如何でありませうか。天地には晝夜の別があり、春夏秋冬の氣候の變化があります。晝が生即ち生きて居て、夜が死でありませうか。春夏は草木芽を吹き出します。爲に生であつて、秋冬は物が枯れ果てますから死でありませうか。處が此れ等は皆然らずして晝夜の事に就ても晝が生であつて夜が死であるごは決して申されませぬ、たゞ明るくなつたり、暗くなつたりするだけのことで、晝も夜も打續いて居ります。春は芽を出し夏は繁り、秋は枯れ、冬は葉が皆土の中に這入つて仕舞ひますが、これは現象物の變化ご申しま

して、唯眼に見える形が現れたり隠れたりするのであります。眞の死ちやの生ちやのご云ふ譯ではない。春夏秋冬打續いて居る。晝夜打續いて居る。現象物は現れたり滅したりしますけれども、天地の大本體に至りましたならば決して生死の別はありません。人間もその通りで、生物である、又死物であるご申しまして、生れたご云ふのは、即ち現象物ご云ふ肉體が出て來たので、死したご申しますのは、此の現象物たる肉體が元の土に歸るごいふのみであつて、人間ご云ふものの本體はご言ひますご生死を別つごことはないのである。別つごこのないご云ふごは次に追々分るやうに申述べます。人間の事を考へて見ますご、人間一生涯の事は天地の一年間によくも現れて居ります。たごへば一本の櫻の木を例

にして見ます。春が来て芽を吹初める。花が咲く。葉が繁つて生々として居りましたものも秋が来れば葉が枯れて散る。散つたあさは枯木の如くなり果つる。其の枯木の如く成り果てた時はさうして居るか云ふと土の底に於て来らん春に花を咲かせる準備をして居るのであります。人も生れて出た時は丁度櫻の木の花が芽が出た如きものであります。追々々に生ひ立ちまして花を開きます。所謂若き時を花の如しと譬へられて居る。やがて花が散つて瑞々しい葉櫻となつて来段々緑が深まつてその生々とした姿は二十五六から散り雨がかれば落ちます。花の時分には少しの風が吹けば散り雨がかれば落ちます。併しながら葉櫻となること多少の風や雨では落ちも散りも致しませぬ。シツクリと引き緊

つて、吾れ櫻木なるぞ、風来れ、雨来れと云ひ顔に元氣旺盛であります。人間もさう云ふ時代があるかと思ふと、追々白髪が出来かけます。白髪が出来かけますと、それと共に段々身體が弱つて来ます。遂には靈魂と身體が分れて、花を咲かせ葉を繁らせた其の形は元の土の中へ歸る。丁度一本の櫻の木が人間一生の事を一年の間に現はして居る。斯う云ふやうに天地と人間との變化の有様が同じやうになつて居ります。今は元素學と云ふものが開けました。近頃物理書を調べませぬので、或専門の大家へ、年々元素は殖えて行つて居ります。すが、今年はこの位になりましたか。問ひましたら、今のころ天地一切の元素は七十二まで現はれて居ると答へて呉れました。して見るに天地一切のものは七十二の種から現は

れて居る。今日の物理学に基づいて此の七十二の元素を材料に取つてお話しすることは本職には出来ませぬが道理は同じであるから七十二の事はさて置いて五行の説によつて説かうと思ひます。昔の人は天地一切の物は五行で出来て居るさう思ひます。五行とは木火土金水、此五つのもので天地も人間も出来て居るさう斯う云うて居る。如何にも左様に聞えます。例へば上から言うて見れば先づ木でありますが、野山に草木が生へてをれば人間にも毛髪があります。又天地の間に火がある。即ち火の甚しき所には火山もあれば、温泉も出る。吾々が火を焚かぬのに湯が湧いて出る。人の身體に温氣のあるのは火の力であります。それから土、大地の體になつて居る土がある如く、人間の身體は土のやうな

ものであります。又人間の身體の筋骨は天地間の金銀銅鐵の如きものである。人間の身體に濕ひのあるのは水である。即ち天地間にも水があります。分り易くいへばザツさかういふ風に、此の五つに依つて天地の物象が出来て居るさう昔の人が考へました。印度では是を四大或は六大と云うてをる。四大六大の講義は致しますまい。似たものであります。兎に角五つの物によつて人間の身體は出来て居る。天地一切の物が出来て居るさう云ふのであります。さうであるから、身體の温いのは火に相違ない。肉は土に相違ない。濕ひがあるのは水に相違ない。毛髪のあるのは天地の草木見たやうなものでありませぬ。筋骨があつて身體がシヤンと引緊つて居るのは鐵の如きものである。素よりこれは眞にあらまし

の事柄を申したのであります。五行が七十有餘の元素に分れても、矢張りこれから細かに這入つたに過ぎないのであります。さう考へると大天地は五行によつて出来、人間も五行に依つて出来て居る。それ以上に考へて御覽なさい。天地には日月があつて有らゆる物を照らす。吾々には兩眼があつてあらゆるものを見る。而も日月なかりせば吾々は眼を開いても見ることは出来ない。又天地日月ありとも吾が眼を失はば現象物は見られない。天地に日月の明があれば吾々には兩眼の明があります。又天地に空氣があり吾々人間が呼吸してゐます。天地に空氣なかりせば呼吸は出来ない。天地が温かなれば吾々の身體も温かい。天地涼しければ吾々も涼し。天地寒ければ吾々の身體も寒い。今年は惡歲で

大變流行病があること云ひます。其の流行病はさうして起つたかこと云ふと、天地の氣候常ならず不順であつた爲に人間の世の中に大層な流行病がはやること言ふ事になるのであります。又手近い事では病氣になつて居る人が今日はお天氣の加減で氣持が快い、或は氣候が變つて來たので氣分が悪いと云ふではないか。實に奇態なものであります。人の身體と天地の事が一々相通じてをる。これによつてお互の身體が天地の眞理と一致してをる見當がついたことと思ひます。

併しながら以上述べた事は天地人間の作用について申したのであつて、此の作用の本體は何であるか、即ち作用を起す力の主人は誰かと申しますれば、それは天地の大神靈たる神

様であります。これを人間について見れば、斯うして生きて作用をして居るのはその身體に神靈即ち靈魂があるからで、天地に於ては大神靈人間に於ては神靈がその本源であります。神靈なければ人間はなし。而して神様は御互の肉眼を以ては見奉るここが出来ませぬが人間もお互に魂云ふものがあつても其の魂の所在を見ることの出来ないと同じであります。大きくても小さくとも道理は一つである。斯の如くに人間と天地とは相一致いたしてゐまして、天地の道理が人間一人の身體に備つて居る。人間一人の道理を擴げて見れば大天地となり、大天地を縮めて見れば吾々人間となつて居ります。是れ即ち人の生は大天地の中に小天地として現はれたもので、人の死は小天地が大天地に歸るのであるこ

いふ譯を示してをります。されば人が生れて世に來ますのも、死して元に歸りますのも、皆天地の懷の中であつて、教祖は「生ても死ても天と地とは我住家と思へよ」、「天にまかせよ地にすがれよ」と仰せられました。即ち此の一身は天地より出で天地に居り、又天地に歸るのでありますから、生死共に天地の主宰たる神様の御支配を離れることは出来ませぬ。それ故に生きるも死ぬるも一切御神意に従ひ天地にまかせ絶るより外はないのである。宜しうござりまするか、人は天地より出で天地に居り、天地に較ぶれば譬ふべくもない小さいものなれども、此の小さい人間が大天地の道理を身に備へ、その道理によつて一代の作用をなし、やがて元に歸つて大天地に合體する。平たくいへば神より出で、神の道に従ひてはたら

一八
き又神に歸るのであります。かく考へる時、人間は實に貴い
ものではありませぬか。諸君、人間は斯う云ふ貴いものであ
るが、此の貴い道理や眞理を知らざる者が世にあるが故に、教
祖の神は御出現遊ばされて、これをお示し下されたのであり
ます。

かく説き來りまして、大天地の眞理が小天地の人に備はる
ご云ふことが悟り得られたならば、お互人間は一切萬事天地
の大神靈たる神様の御恵によりて存在するものであるとい
ふことが分りませう。即ち吾々の出て來た本源は神様であ
り、その御恩徳によつて生き、その御神意によつて又神様へ歸
るのでありますから、神様は吾々の親であり、吾々は子であり
ます。此關係を我教祖の神は神は我本體の大祖ぞ信心は

親に孝行するもおなじ事ぞご教へられました。天地金乃神
は吾々の本體即ち親様である。この天地金乃神に一心に信
心を捧げることは、吾々を生み、吾々を育て下された親に孝行
するのと同じである。この御教であります。我本體たる天地
の親神様に一心の眞の心を捧げるを信心と言ひ、肉體を生み
出し育て上げて下されたる親に信を盡すのを孝行と云ふの
は、名が異なるのみにして、其の精神其の誠は一つである。人とし
て親に孝を盡すものと盡さざるものとはあれど、孝を盡さば
るを惡しき事とし、孝を盡すを善事とし、親に孝を盡さなければ
ならぬと云ふことは、誰も知らない者はない。教へざる者
もない。然るに前來述べ來つた如く、大天地の親神様たる天
地金乃神の御恩徳に依り、大天地の眞理を備へて吾等が世の

中に斯の如くに住ひ、生ても死てもその御慈愛に漏るゝことなき事を今迄誰も教へて呉れた者がなくて、此の貴き天地に金神と云ふ悪神邪神があつて、人生に方位方角の咎め崇りをすると忌み恐れて居つた所に、我教祖生神が吉備木綿崎山の麓に御出現ありて、「今天地の開ける音を聞いて眼を覺せよ」と、この天地の大眞理たる眞の道を教へ下されたのであります。されば我金光大神を教祖の神と申すのであります。かく天地の親神様の御恩徳を吾等に傳へ、今までその御恩徳を蒙りながらも知らずして過した、親神を知らしめ給ひしは實に教祖の神であります。誠にありがたいことである。

此の故に教祖は神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事と教へられ、又吾々を天地の神様の氏子と仰せら

れたのである。氏子とは生の子と云ふのと同じである。親神様と我々との間のことは肉身の親子の事を考へて見ますとよく分ります。親が子のために悦ぶことあれば、子も亦親の爲に悦ぶ。親が子のために泣くことがあれば、子も亦親の爲に泣く。云ふのが肉體を分つた親子の情愛であります。天地の神も亦然り。氏子が悦ぶことあれば、天地の神も亦氏子のために悦ばせらるゝ。氏子が神のために泣くことあれば、天地の神も亦氏子の爲に泣かせらるゝ。これが親に對する子の孝行と、神に對する氏子の信心と云ふもので、その意味は一つであります。子が泣いて暮せば親も泣いて暮す。親が泣いて暮せば子も泣いて暮す。これ眞の人の道であります。親が泣くに子が泣かず、子が泣くに親が泣かざるは眞の

道にあらす。然れども泣くは吾々親たるものゝ好まざる所、
亦神様も好ませ給はざる所である。世の中の人よ。泣きて
暮らさぬやうに致すことが肝要であります。吾の悦ぶ所は
神が悦び給ひ、神の悦び給ふことは吾の悦びとなる。親に
對しては親を悦ばすが孝行の道、神に對しては神を悦ばし奉
るが信心の道、本體の大祖神と、肉體を育て上げたる親に事
ふる道は一つであります。この道を備へたものが人間であ
る。お互は實に貴い身の上であることを自覺すべきであり
ます。

人間も教を受けないものは仕方がないもので、私が一昨年
上京した時、御徒町の床屋へ参りました所が、其處に五十格
好の仕事師の頭でもするやうな人が來合せた。そして其の

日は主人が居らず、お内儀さんが居て弟子が仕事をして居り
ました。私が毛剃をさせながら聞いてをるご、お内儀さんが、
『今日は何處へお出掛けでありますか』と尋ねた。するご、『豊
川へ詣らうと思つてる。ごうせ俺等は眞面目な神を拜んだ
所で守つては呉れはしない。だから豊川へでも行くより外
はない。』『あくさうでございますか、それは宜しうございませ
う』と言つて居りました。これ丈の話であります。これを聞
いた私は甚だ情けなく思つて、そこで説教を始めようか、ごま
で思つたのであるが、忙がしさに人力車を待たしてゐた際、
あつたので、其の儘歸りました。人が、ごうしても教へなけれ
ばならぬものであります。我教祖の教を片端でも知つてゐ
たら、こんな淺間しいことは言ひますまい。豊川は如何なる

ものか正法か邪道か吾れ是れを知らないが眞面目な神を拜
んだ所で守つて呉れはしないとは同じ人間でありながら浅
間しからずや。實に吾々は大地の眞理の備つて居る萬物
の靈長といふ人間ではないか。然りながら道を知ると知ら
ざると眞正の神の教によつて救はれたると救はれざるとは、
斯程までに違ふものであらうか。萬物の靈長たる人がさう
云ふ考へであつたならば、天地の神は其の人のために泣かせ
られ、其の氏子のために悲まるゝことであらうと勿體なく思
ふと共に、又其の人の爲に同情に堪へませなんだ。正しい道
を知らないと云ふことは如何にも憫れなことである。以上
申述べ來りました所をお聴きになつて諸君は何うお考へに
なりますか。大天地の眞理が小天地の人に備つて居る。そ

の本體たる大神靈を稟けて之を我々の分靈とし、親神様の氏
子として死生共にその御恩徳にあつかつてをるのであるこ
とが悟れば、人間と云ふものは實に貴いものであるといふ
ことが御自覺出來たであらうと思ふ。其の貴さ其の有難さ
を傳へるものが無く、世は長く邪の道に迷うてをつた中に御
出現遊ばされて、此の有難い道を御教へ下された教祖の神の
御苦勞と云ふものは、逆も筆や言葉には盡されませぬ。其の
教祖の神が神上りなしまして、今年は二十五年となり、記念布
教としてかく一場の神語りをし、お互に御神縁を以て教祖の
御道に救ひ上げられ、大天地の眞理は小天地の人に備る所以
を知り、信心は親に孝行するのと同じであること悟らして頂
たることは誠に忝けない事である。茲に於て吾等氏子は益

々信心を進め、廣き道に出で、嬉しき事來るも、惡しき事來る
も、生きても死にても、天地の神と共々であるこの信念を固め、
天地の親神様と教祖生神様に悦んで頂くと共に、此の道に
お助け頂いた忝なさを御禮申上ぐるこそが眞にこの記念の
御祭に仕へ奉る肝要な精神であると思ひます。(拍手)

金光教の人生觀

講 題 金 光 教 の 人 生 觀

(明治四十年七月一日夜
於金光教東京教會所)

諸君も今晚は雨の模様のごころ能くお詣りなされました。是れから此處に掲げてある『金光教の人生觀』といふ講題によりて神語りを致します。只今片岡前講から教祖の道の御本義も申すべき有難い御傳へをお聴取になりまして、嚙御蔭をお受けなされたご存じます。私も當時を偲びてお蔭を頂きました。私が神語り致すに先ちて、斯る教があります。たことは、諸君に人生觀を悟つて頂く上に大變都合のよい事であると思ひました。只今より金光教の人生觀についてお傳へ致しますが、是れは今日お傳へ致します。大天地の眞理は小天地の人に備る。といふ事。其の趣が違つて居りますが、

其の内容の大部分は同じ所に歸着するのでありますが此の眞理を會得し易からしむる方便として斯ういふ講題を設けたに過ぎない位に思うて貰ひたいのであります。さて人生觀を申しますことは吾々人間が此の世に生れ生活し居るの何のためであるかと云ふ觀方でありまして即ち人たるものゝ生活は如何にあるべきであるかの考へ方であります。これに就ては宗教に依つてそれ〴〵觀方が違ひます。宗教にはいつれも人生觀といふものがありまして佛敎には佛の敎として人生觀があり、耶蘇敎には耶蘇の敎として人生觀と云ふものがある。釋迦如來は此の世の中の人を何と見たか。基督は此の世の人を何と見て敎をしたか。斯ういふ譯であります。譬へて言へば同じ櫻の花を見るにも甲乙丙と數人

が居つて見る時には決して皆が一樣には見て居ない。甲の人の見て居る心と乙の人の見て居る心と丙の人の見て居る心と一つになつて居る時もある。又大いに違つて居る場合もある。或は去年は母を伴つて櫻を見たが今年母が居らないと思つて櫻の花を母を偲ぶ心で見ると人もあらん。物の道理を穿鑿する人は此の花は何ういふ譯から睨いたであらうかと思つて見る人もあらん。或は櫻の花を見るのは愉快なものである。美人を見るのさ何方が良いであらうなごいふやうな心を以て見る人もあらん。同じ日本人が見るのでも見る人に依つて違ふ。それと同じ譯で一つの宗教を立てた教祖は必ず人生に對して一定の觀方を定めて敎を立てるに傳ります。我が金光教祖は此の人生を如何に見て斯の道を傳

へられ、吾々御互を御導きなされたかその片端を諸君に御取
次をして、金光教の人生觀は如何に云ふことを共に考へて
見たいと思ふのであります。

さて人間の世の中は一面から見れば快樂のやうである。
又一面から考へるご中々苦痛である。確かに斯様に思はれ
ます。考へて御覽なさい、一年を春夏秋冬の四季に別けてあり
ます。春來つて野山の草木に花が咲いた。此の花は誰が
爲に天地の神は咲かせられたか。吾等を樂しましめ給はん
ためであると思へば、花を見ても有難いと思ひ愉快でありま
す。今に炎熱の夏が益々激しくなりましたが、此の暑さは誠に
苦しけれごも汗を絞りつく登つた山の木蔭に憩ひ、緑蔭樹
下吹來る風が肌を掠める時、あゝ涼しい、よい風ちや、是は神の

風ちやご云ふ位に愉快に感ぜられるごもある。秋もその
通り、秋は悲しく觀するならば随分悲しく觀せられるが、あゝ
野山に織出す錦、誰がために織出たのであらうか。人を樂
ましめ給ふ天地の神の美妙の業や眞に有難いと思へば、秋が
來ても眞に嬉しい。冬ごなつて木の葉も落ち、枯れ木の立つ
た山はうら淋しく悲しいものであるが、折柄降り來る雪に見
舞はれて、あゝ時ならぬ花が咲いた。誰がための花の雪ぞご
思へば、寒さを忘れて、歌にもうたはれ、詩にも作られ、愉快に感
じられます。又日々の日の御照しにしても、地球上一度にズ
ラリご御照しになつてをらぬ。或部分は晝で明るく、或部分
は夜で暗い。その一日が日によつて嬉しい日もあれば、悲し
い日もある。夜は暗くて恐ろしいやうにも思はれるが、一日

の疲れも夜があるので前後を忘れて眠られると思へば眞に
愉快なものである。斯様に考へ方によつて人間の世の中
云ふものは楽しい世の中でもあり又人生云ふものは苦痛
でもある。雪月花の自然が苦樂の種であるばかりでなく泰
平の世もあれば戦争の時もある。戦争の如きは苦痛の最も
甚しきもので戦争は人情の上から考へても宗教の上から考
へても實に慘憺極まるものであるが國の守の神と立つと思
へば勇ましき尊き限りである。又考へて見ますれば人生は
變轉限りのないもので吾等生れ來るや幼年はいつか少年と
なり青年となり今は青年時代で物の道理研究の眞最中進歩
發達の眞盛りであると思つて居るごやがて壯年時代が來る。
今が壯年時代だと思つて居るご老年時代となる、年が寄つた。

隠居でもしたいと思つて居るご遂に死んで元の土に歸らね
ばならぬことゝなる。又その間には病氣や災難にかかると
があり事業の失敗や貧乏に苦む事もある。斯く見れば實に
人間は果敢ない厭なものになつて來る。けれども人間の世
界は面白い。働き甲斐のある世の中や。貧乏から出て此
金持になつた。益々事業が面白く運んで行く。卑賤から出
て今の身分になつた。苦しい心配な。何案するより生むが
易い世の中や。勇ましく元氣でやれご常に何事をも樂に
觀て居るものもあります。斯う見ると此の世の中は快樂で
もある。併しながら苦痛と快樂とは此の笏の兩端の如く又
表裏の如く離るべからざるものでその立場により見る方面
によつて苦痛と感じ、快樂と感ずる皆心の働きに過ぎないの

三十四
であります。人生の本義に立至りますご苦痛も感じなければ快樂も感じないのが眞理であります。段々ごそこへ説き至らうと思ひます。

そこで更に、此の我一身は何の爲にこの世に生れ來りしや、お互は如何に生活すべきであるか云ふ問題を考へて見ねばなりません。人生はたゞ苦痛と快樂とに左右せらるゝ如き無意味なものであつてはならない。一面から苦痛と見一面から快樂と見た所で、此の二つのものは人生に纏うて居るので、お互は苦痛のために生れて來たのでも、快樂のために生れて來たのでもない。お互が生れてこゝに此の通り生存してをるごいふことは之は動かす事の出來ぬ事實であります。この生存してをるものは何かの一大意義を持つて居らねば

ならぬ。即ち人は人としての役目を擔うて此の世の中に来て居るものであるごいふ自覺が萬物の靈長と謂はるゝ人間の價値でありまして、此の自覺は私共に一大責務を悟らしめます。快樂である、苦痛であるご云ふことはそれに纏うた心の感じに過ぎない。然らば其の一大責務とは如何なるものか。此は随分大きな問題でありますが、一言にいへば理想に向つて努力し之を實現するごいふことである。其の理想とはどんな事か。金光教に於ては人格を高めて神格に上すことを理想として教へてをるのであります。人の資格を發揚して神の資格に向上する事更に他の言葉を以て言ひますと、天地乃神と吾とが一つになるご云ふのが理想であり、こゝに人は人たる價値を自覺し、之を一大責務と感じてをるのであります。

す。晝の説教に於きまして、我教祖の神が生ても死ても天と地とは我住家と思へよ。天にまかせよ。地にすがれよ。と教へられたことについてお傳へ致しました。が是れ即ち人格を高めて神格に上すべき人生觀を示し賜はつた教であります。人が斯うして世の中に居るのは何處に居るのであるか。天地の神より出で天地に居るのである。神の天地に住むお互は又神でなくてはならぬ。こゝが人間の尊い所以であつて、春の花を見ては浮れ出し、秋の夕暮を眺めては悲むといふやうに、苦痛快樂に左右せられて世を無意味に過すべきではない。

只今申述べました如く生きても死にても天と地とを我住家と致すお互は、神の氏子として神らしいものであらねばな

らぬ。即ち人格を高めて神格に上すことが眞に人たるもの理想でありまして、教祖が神徳を受けよ人徳を得よと諭し賜りました御教こそ、正に本教の人生觀をお傳へ下された御神訓であります。人徳は人格であり、神徳は神格であります。自己の修養によつて人徳を得、更に進んで信心のみかけによつて、神徳を受け、神と我と一致するに至るが人生の極致であり、信心の眞義であつて、人間の生活は斯くあるべきものと觀るのが金光教の人生觀である。論より證據我教祖が生神金光大神と立たせられた事が何よりの實證であります。されば教祖生神の御跡に倣ひて、我情我慾の私心を去り、我れを清くして神の分靈たる資格を明かにし、神の御前に出で、愧づる所なき生活をなすに至らば、早や神と吾とは一致してをる

ので、神と共に住むといふことが出来るのであります。若しも神の御前に出で分靈たる資格に愧づる所あらば、如何に口に語り、如何に信心してをるも、神と一致して居らぬのである。斯く人生を觀て、修養に努め、信心に勵めば、生きて眞實に國の爲め、社會の爲に立働きて、死して神界の靈神たるべく、生死を通じて天地の神と共に働きて、天地の神と相共に居るといふことゝなるのであります。

斯の如く觀じれば、人生は樂みも樂みもして安んずることゝは出来ない。苦も苦もして悲しんで居ることゝは出来ない。吾心を神と一致せしむるといふ大目的を以て、人生の責務を完うせん、と勇み進んで立働くべきものである。となすのが金光教の人生觀であります。そこで又教祖の神は、「我身は我

身ならず、皆神と皇との身とおもひ知れよ」と教へられた。此の御神意は、此の五尺の身體は、天地の神より出て我となつたのであるから、此一身は我身には相違ないなれども、我身體ちや、死なうと生きよう、と勝手ちやと云ふ如く、我儘に暮すことゝは、天地の神は許さぬぞ。又お互日本人は、神様から出たものである。と共々皇上の物である。神代以來皇室を本源として、先祖代々生をうけて今日に至つてをるのであるから、日本臣民の生命は天子様のものである。自分のものであるから、勝手に振舞ふといふことは是れ又許されぬ。この御教であります。かく天地の神のものであり、皇上のもので、その支配に依て斯うして生て居るのであるが故に、一は神様の掟に従ふべく、一は國の掟を守るべきものであります。又教祖は「我身

が我自由にならぬものぞ。こも教へられた。凡そ人間は我身
は我自由に生きて居る。或部分迄は言へるかも知れないが、
其の眞實に至る。我身は我自由にならぬものである。一寸
考へて見ても、病氣は煩ひたくない。云うても、死にたくない
。云うても、己が思ふが儘にならぬが。この生身。云ふものぞ。
生身は肉體である。斬れば血が出る。痛みを感じる。喰
ねば飢を訴へる。是が人間。云ふものぢや。我身は我自由
になる。と思ひ、我口は自由に利くものだ。と思へば思はる。け
れども、人間。云ふものは思ひの儘に暴言を吐いては世の中
は通れぬ。我足は我が自由であつても、ヅカ。誰の前
でも飛出して行く事は出来ない。宜しいか。我手は我が自
由であつても、或程度までは人の前に手は出せない。斯様に

考へて見れば本来吾々の一身は自分で自由にならぬ。思ふ
がまゝにならぬ。そこで病氣。なれば。ごうかして是れを癒
したい。貧乏ならば。ごうかして發展開運したい。ごうかして
が起る。その希望は。たゞ自分一個だけの身慾からでなく、此
の身體は神。ご皇。上。ごの身。ご心得。て。壯健ならば。愈々壯健に。病
氣ならば。早く病氣を癒し。貧乏ならば。早く開運發展いたして、
家の爲にも。國の爲にも。君の御爲にも。立ち働。き。人間の責務を
果さねばならぬ。ごいふ。高い覺悟を以て生活する。のが。金光教
信者の神の御心に叶うた生活であります。斯う覺悟を致し
ます。ご泰平の時に於ては。泰平の世に處して。此身體が粗末に
ならず。又天地の神の爲め。國家の爲に働いて居るのである。か
ら。國に事ある時は。一身を捧げて働。く。ごこゝなり。戦争は。前に

も述べた如く、人情の上からも、宗教の上からも之れほど悲惨なものはなく、厭なものはないなれども、君國の御爲と思へば苦痛と思はれぬことなる。物を苦にすれば前にも述べた通り美しい花を見ても其の散るを憂へ、澄み渡る月を見ましても心が曇る。それかご申して何事も面白く愉快愉快で浮かれることも輕卒である。たゞ苦樂のみに動かされては極端に極端にの精神病者となる。そんな事で世の中が保つものではない。

以上申述べた如く、金光教の人生觀を了得し我苦痛を苦痛として悩まず。快樂を快樂として安んぜず。絶えず怠らず人間の格式を高めて、天地乃神と一つになるやうに修養信仰を進め行くが人生の責務であります。天地乃神様の懷の中

に住みその懷の中で家の爲め國の爲に相共に働くのが人生の眞義であることを教祖の神は教へ給はつたのであります。世の中の苦樂にのみ支配せられて居る人間を見備はして、之を苦界より救ひ、之を快樂に安んぜしめず、偏に人たる眞實の責務を完うせしめたいと思召されて、かくは導き給はつたことであり、教祖が長い年月の間御心行遊ばされたのも、此の一つに歸するご申上げて、敢て過言ではなからうと思ひます。繰返すやうなれども、樂しみちやく、世の中を笑うて過さるゝ人よ。悲しい、世の中を泣いて過さるゝ人よ。「生ても死ても天ご地ごは我住家と思へよ」「天にまかせよ地にすがれよ」「ご大安心を與へられた御神意を悟り、我身は我身ならず皆神ご皇上ごの身ごおもひ知れよ」「ご人たる責務

人 智 は 有 限

を 示 し 給 っ た 眞 理 を 會 得 し 寢 っ て も 起 っ て も 往 々 歸 る も 皆
天 地 乃 神 の 懷 の 中 に 於 て 人 たる 道 を 務 め 得 せ し め 給 ふ 有 難
さ を 觀 じ 神 德 を 受 け 人 德 を 得 る に 至 ら れ ん こ こ 切 望 に 堪 へ
ぬ 所 で あ り ま す 。 (拍 手)

講人 智は有限

(明治四十年七月二日 於金光教深川教會所講)

何方にも能くお参りでありました。此の度は豫て御承知の通り教祖二十五年記念布教と致しまして出張を命ぜられ、昨日は東京教會所にて晝夜開教し本日は當教會所に於きまして晝夜の開教を致します。豫て支部より通知してありました。講題の「私心の組」が違ひまして、今見ますれば、来る六日日本橋教會の晝席の講題が此所に出て居ります。何れにしましても順を逐うて参りますから、此の席に於ては揭示の通り「人智は有限」と云ふ題に就きまして神語り致します。扱此の講題の「人智は有限」と云ふ意味は、人間の智恵と云ふものには限りがありまして、天地間の一切の事柄を残らず知

らうご致しましても、或程度までは知れますけれども、其れ以上になるご、知り難いご云ふごから、信心上如何に心得べきであるかについて、我教祖の御教を神語りして見たいと思ふのであります。

世に學問を致して居る者は、天地の間の一切の事を知らう。天地の間の一切の道理を究めようご苦勞して居りますが、諸君信心して居られる方々が、道を聞きたい、今一步進んで信心の道を知らうごせらるゝ如く、天地間の道理を究めたいご日々夜々心を盡して居ります。そのために日々人の智恵が進んで来て居るのである。そこで人間の智恵が進みました結果として、今日は老年の方々も多く居られますが、昔大層不思議であるご思うた事も、今日は不思議でなくなり、段々不思議

議ご云ふものが減つて來ました。人間の智恵の進まない時代に於きましては、あれも不思議、これも不思議、人間の智恵で知れぬ事は皆不思議の中に入れて居りましたが、今は其の不思議が段々減じて少くなりました。例へて見まするご、此の頃あり勝ちな雷又鳴神ごも申します。あの雷が鳴るご云ふごは、今では不思議ではないが、今白髮の生えた方々の幼少の時分には不思議の中に入れてゐた。雑書本ご云ふものがあつて、それに繪が描いてあるのを見ますご、何物ごも分らぬやうな獸が居つて、太鼓をドロン／＼敲いて居るのが鳴神である。空中で太鼓を敲き廻る所が描いてあるので如何にもさうであらうと思つて、それで雷鳴様ご様まで附けて神様の如く信じて居つた。大きな音がドロ／＼ゴロ／＼致

四八
しますから大變に恐い不思議なものであつたが、今日は不思議でないことになりました。あの雷鳴はごう云ふ理由で鳴るのであるか、と申しますと、雲と雲とに電氣がある。今は電氣と言へば誰にでも直ぐ分るやうになりました。其の電氣が學問の言葉でいへば放電し即ち陰電氣と陽電氣とが突き當るごバツと光を放ち、忽ちガラ／＼と鳴るのである。一體光といふものは早く眼に見えるが、音が耳に聞えるのはそれよりもつツと遅い。鐵砲を撃つて火が出てから暫くせねば音が聞えぬ如く、陰電氣と陽電氣とが衝突して火花を發する。それが電光である。光ると共に音を發する。それが雷鳴である。光の方が早いから先づ電光が見えて暫くするごガラ／＼と音が聞える譯であります。斯う分つて來るご別に鳴

神様は居らぬやうになつて太鼓を敲いて居る不思議な物は空中から消えました。併し不思議な動物は雷獸と分つて來た。是は人間の智恵が進んで來たから不思議な物が無くなつたのである。もう一つ空のここに就て云へば、日蝕月蝕の事である。此邊は流石に都で昔は江戸今は東京であるから別であらうが、田舎では月蝕には五穀が降るごか、毒が降るごか申しまして、子供の時分には月蝕の夜は外へ出ななんだものであります。又日蝕月蝕は日月様の御煩ひで、天下の人の爲に御病氣にお罹りなされるのであるごも言つて居りました。併し今は日と月と地球との三球儀を見て日蝕月蝕は小學校の生徒も知るやうになつた。又地に就て一番不思議に思つたのは地震であります。東京の名物の一つである。是れは

皆がよく申す通り、大きな鯨が地中に居つてウネリ／＼するから地面がゆれるのであると云うて居りました。さて今日は地震學が開けてその大鯨が姿を隠しました。斯様に人間の智恵で天地の事を知り究めやうとする努力は段々不思議を取除けて、チャンと道理の中に收めて仕舞ふやうに世の中がなつて参りました。

斯様に世が進歩するに従つて總ての學問が開けて來、生物には生理學があつて人間の身體についてはその一切の組織を取分けて見る人體生理と云ふものがあるなれば植物には植物生理と云ふものがあつて庭に生えて居る木の一本、草の葉まで、すつかり道理を究めて行くことが出来る。これは一二の例に過ぎません。その他萬般の學問が細かく研究を

進めて天地間の不思議と云ふ部分が段々減り、人間の不安も追々減じて來ます。けれども天地一切の事を人間の智恵を以て究めつくさうとしても、究め盡すことは出来ない。曩に申した雷鳴にしても、成ほど陰電氣陽電氣が衝き當つて鳴るのであると云ふことは分つて來たが、其の陰電氣陽電氣はさうして起るか、又何の爲に起つて來るのかなど、その一二段奥を尋ねて行くともう分らぬ、日蝕月蝕も其の通り。日と月と地球との運轉の經過によつて現はれる事は分つて來て居りますけれども、段々切詰めて行きますと分らぬことなるであらう。如何に生理學が開け、植物學が開けたと申しましても、枯木の如く成果てゝ居りまする櫻の木を伐りまして、それを切割つて一々分析して見たところで、春此の木の中から

何故麗はしい花が咲いて出るのか何がさういふ活動をさす
のであるか詮索して行けば矢張り其の花の咲くことは分
りませぬ。かく何程人間の智恵が進みましても、天地一切の
事を知りたいと人間は思うて居りますけれども、段々切り詰
めて上に遡ればどうしても人間の智識では知り難い所へ行
き當ります。天地の間の眼に見える物についてもさうであ
る。況んや神様の上のことを人間の力を以て知らうと云ふ
ことは出来得ぬことでもあります。天體の星は望遠鏡を以て
見れば見える、兎が餅を搗いて居ると云はれた月の世界も、望
遠鏡で見れば山や谷の重り合つて居ることが分つて來た。
けれども眼鏡をかけて見る能はず、分析器械にかけて見る能
はざる、此の天地を全生にしてござる神様の御上を、人間の智

恵を以て知り盡すことは、是れから幾百千年の將來と雖も先
づ出來ますまい。
そこで人間の智恵をもちましては、或程度までは知ること
が出来るけれども、それ以上に於ては知ることが出来ない。
故に我教祖の神は、信者たる者が信心を進めんとする一念は
宜しいけれども、知るべからざる所まで知らんとして却て信
心を損ずることがあつてはならぬと「天地の事は人の眼をも
て知りて知り難きものぞ恐るべし」教へられた。
人の眼を仰せられたるは人智にして眼識のここである。物
の道理を知らうとするところは誠に宜い事であるけれども、只
今説いた如く、或所以上に達すれば知ることが出来ない。天
地の事は人の眼を以て知りて知り難きものである。恐るべ

し恐るべし。即ち我教祖は信心する者で世の中の學問理窟
に囚はれ、智慧に走る者のために、かくは御教へ下されたので
ある。

天地の間にはスベンサーの哲學に云へる如く可知界と不
可知界とがあつて、可知界とは此の界までは人間として知る
ことが出来るけれども、此所からは人間として知ることは出
来ない界がある云ふことで、知り得られる所と知り得られ
ざる所とが自然に天地の間に別れて居る、定まりが附いて居
る。人間としてはその定まりが附いてをる不可知界を飛び
越えそれ以上に進んで、一切の問題を切り開かう／＼とする
一念があるから、智慧が進んで行き、世の中も進んで行くので
はあるが、どこまで行つても不可知界は残る。究め盡すこと

は出来ない云ふことを土臺に置いて、神様の上を信心せぬ
はなりません。天地の眞理即ち神様の御内蔵を知らうと言
ひまして、吾心の奥さへ中々知り難いのであります。中に
は斯う云ふ人さへある、私のこの心云ふものは全體どうな
るのであらう。吾心を吾心で考へて、吾ながらどうも不思議
なものである云ふ人さへある。吾心を自分で知り盡すこ
とが出来ない程のものである。況んや神様の御上の事は容
易の事ではありませぬ。神様の御上のことを知らうと思ふ
ならば、唯一筋の信念力によつて信ずるより外はない。信念
の力は學問の知識よりも恐ろしいもので、口で語ることが出
来なくとも、眼で見ることが出来なくとも、心の中で覺ること
が出来、知る事が出来る。前にも説ける如く、人間は皆天地一

切の事を知りたいと思ひます。天地一切の道理が知りた
ご思ひまして進み行くのは人間の向上心であるから進み進
んで行くべきであるが、行きつまつたら、そこよりは智を離れ
理窟を去り、信念の力によつて此の大天地の事を吾心の中
悟るご云ふ御蔭を受けるやうに進んで行きたい。
昨日「大天地の眞理は小天地の人に備る」ことを東京教會に
て晝席に説きました。其の道理が備はつてゐても、神様を人
智を以て計ることは出来ませぬ。信心と言ふものは科學で
も哲學でも理窟でもありません。唯無我無心の信仰の一念
力である。空論や空理ではなく、實在實行である。神を目標
に念ずる一心の念力が信心であります。此れを御承知にな
りたい。一心の念力は文字にて現はすことも出来ねば、又現

はす必要もないのである。曩に申した通り、或程度までは天
地の事も、天地の道理も知る事を得れども、神様の事は信心の
眞一念を以て覺るより外に術はない。そこを教祖の神は眞
の道を行く人は肉眼を置いて心眼を開けよと仰せられたので
ある。神様の道に通ふ御徳を戴かうとするには、議論や理窟
や、この肉眼の作用に止まる人智を以ては靈驗を受けられる
ものではない。此肉眼を置いて信心一念の心の眼を開くな
れば、教祖の神の示し給へる大道の中に天地金乃神への通路
を見出し、煌々たる光明ある所に導かれるぞと、斯様に教へら
れたのである。これが金光大神の開かせ給ひし眞の道であ
つて、肉眼を置いて心眼を開き得るならば、神様の洪大なる御力
その御恩徳が段々分つて來、無限の貴さ、無限の有難さが心の

中に收まつて来る。諸君はこれまで眞の道をふみ又今日は
眞の道を聴きにお出でになり、一段高く眞の道に進まんごし
てお出でになつたのである。議論を聴き理窟を聴きに参ら
れたのではない。偏に教祖が導かせ給うた眞の道に進ませ
て頂き度いこの念願を以て参られたので宜しく肉眼を置
て心眼を開き、疑ひを離れて廣き眞の大道を開き見よ我身は
神徳の中にいかされてありこの御教を諸君の心に悟つて貰
ひたい。然らば「神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ信
頼心に隔なく祈れ」この生神金光大神の御聲がアリくご諸
君の心に響いてまゐります。心眼開けねば壁一重なくとも、
此の話が耳に入りますまい。然れども眞一念あるならば、金
光大神の御聲は千里を問はず、天地乃神の御聲は諸君の心の

中に遠きも近きも問はず聞えて来る。神様の御恩徳神様の
靈驗は上下身分の差別なく、遠近場所の隔てなく、天地一貫平
等である。但それは眞一心の信念を以て祈る所に神の靈驗
は現はれる。こゝを覺つて一層眞一心の信念力を揮ひ起し、
益々天地乃神の御徳に接して貰ひたい。
かく教祖は神は遠きも近きも問はぬぞよご御教へ下され
た。そこで安心である。お互が生れて來た其の儘に眞白の
靈魂を汚さずに濟むならば、吾靈魂や天地乃神の靈魂、吾等が
身體や金光教祖の導かせ給ふ身體である。吾々は神ご同體
同心で靈驗を受られるのである。併し曩に申しました通り、
人間の智慧ご云ふものが分らざる界を越えて尙分りたいご
煩悶して、藤村操みたやうに遂に華嚴の瀧へ飛込まねばなら

ぬやうな者も出て来る。又智恵が進むに従うて人慾も深ま
つて行き、無駄な智恵や不當の人慾で眞白な靈魂を汚し、無我
無心の眞一念の信心を妨げます。即ち疑ひ心迷ひ心が眞の
道に進む邪魔を致して人間生活を苦しめる事あり、諸君方に
於てはこゝをよ心得て、人の智と云ふものは一面に於ては
時々刻々に進むなれども、一面に於てはそれから上は進めな
い所がある。知るべき所と知るべからざる所とを區別して、
智恵に走つて智恵に災ひされず、人慾に驅られて靈魂を汚さ
ず、信心をせられまますならば、信心に迷ひと云ふものが起つて
來ませぬ。眞一心の信念を得て次々と靈驗を蒙り神徳を進
めることが出來ます。尙注意して置きたいは、信心の爲に學
問が妨げられるやうな事があつては、それは信心ではありま

せぬ。信心の爲に學問が邪魔になる。學問の爲に信心が邪
魔になるやうな事では、それは眞の信心でも眞の學問でもあ
りませぬ。教祖の思召は、天地間の事を知り得る限りは知る
がよい。進み得る所までは進まねばならぬ。併し何うして
も知り得ず進み得ぬ界がある。そこに至つて苦痛煩悶をす
な。信心の一念によりて天地乃神の神徳を悟り、その中に氏
子は廣き眞の道を見出して、光明に導かれつゝ生神に助け上
げられよ。此の道を迷ふことなく我心の中に藏めよと教へ
下されたのである。
天地の事は人の眼をもて知りて知り難きものぞ恐るべし
恐るべし
是れで晝席は終りご致します。(拍手)

神

人

一

致

講題 神 人 一 致

(明治四十年七月二日夜
於金光教深川教會所)

今晚は晝席の如き間違ひなく、あれに掲げてある通り「神人一致」云ふ講題によりて神語りを致します。神人一致とは文字の如く天地乃神と吾々人間が一つになることが出来ること云ふ意味であります。凡そ宗教と云ふものは他力教自力教と申して信心をして安心を得る上に就て大別して二つの道がある。それは吾れ以外の他の力即ち神の力、佛の力に依つて只管救はれることいふのが他力教で、人間は誠に罪深く卑しく且つ無力なものである、故に神佛の力に依つて自分を救ひ助けて貰はうと願ふのを他力教と云ふのであります。又自力教と云ふのは、人は卑しいものでもなけ

ねば無力のものでもない。吾より進んで自分の力、吾の一念
力に依て神佛の道に到達し得るものと、信仰の道を立てる
るのを自力教と云ふのであります。この他方自力といふの
は、これまで佛教についていはれたところで、他方は眞宗が之を
代表し、自力は禪宗が之を代表してをるが、その他方教の中に
も亦自力教を意味して居るものがあり、自力教の中にも亦他
方教を意味して居るものもあつて、何れに致しましても、安心
立命の道に導きまする信心の立方の重きに從つて色々区
別されてをるのであります。所で、我が金光教は此の他方教、
自力教の何れに屬して居るかご申しますと、我が金光教にあ
りては、他方教とも自力教とも申しませぬ。神人一致教と申
すのである。神人一致教とは神と人が一致であること云ふ

金光教祖の道のお立方で、即ち天地乃神と同根なりとの神意
を奉じて教祖御自ら實證をお示しになり、獨立教としての道
の根源をお開きになつたのである。故に御神訓に「神は我本
體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事」と教へられてあ
ります。此の神とは天地金乃神の御事で、天地金乃神は此の
世の中にかく生れて來てをる吾々人間の本元本體の大祖神
である。其の本元本體たる天地の大祖神から出た父と母と
が、天地の眞理に合したる時に於て始めて母の胎内を経て此
の世に來り、父母の養育に依て世に人となつたのが吾々であ
ります。そこで生みし親に眞心を盡すと共に、その本體たる
親神に眞心を捧げねばならぬ。親に眞心を捧げ奉るのを孝
行と云ひ、大祖神に眞心を盡すのを信心と云ふ。その名稱は

異れども其の本義は一つであつて信孝一本である。此の一條の御神訓に依て金光教は神と人とが一つの教へであるといふ道の立て方が明に分つたであらう。

なほ重ねて申しますれば吾等は天地乃神より出て天地に居るのである。此の吾々の一身はもご生みの親のものである。今分れて吾といふ一人となつて居るけれども此の身に通うて居る血は父母の血である。一身を包んで居る肉は父母の肉である。そして其の父母の本體は天地乃大祖神である。分れて吾等が父母となり父母より分れて吾等となる。即ち吾等は天地乃大祖神より出て天地に居るのである。お分りになりましたか。此の根本の道理があなた方の心の腹に入りましたら人間と云ふものゝ解釋が出来ます。そこで天地

乃神は我等を造り出された大祖様であると云ふことが分つた。天地乃神のここを大我と云ひ又大神靈と申します。人間のここを小我又は小神靈と云ひます。神と人は別物のやうに思はれるなれど今申しました通り決して神と人と云ふものが眞理の上からも實際の上からも別物ではないと云ふことがお分りでありませう。かく元が一つでありますから生れて來ても一つであるし。又死しても一つである。天地より出てたるものは天地に歸るの他なし。若し天地より出てたる者が天地に歸らざる時は何うなるか。あなた方は何れからお出でなされたか知らぬが説教が濟んで歸られる時神田和泉町から來たものが日本橋傳馬町へでも立歸つて行つたらそれは歸る道を迷うたのである。深川の家から來

た者が其の深川の家に歸らず、若しも四谷の方へ行つたら、それは歸る道を迷うたのである。天地から出でたるものが天地に歸るのは迷はざる道である。神田和泉町から來た者は和泉町へ立歸るのは正しい道である。これ見易い話で、眼算用で此の道理は分る。それであるから生れて來る所が天地乃神でその天地に住んで、その死後が又天地に歸るのは迷はざる大道に出で大道に立歸るのである。此の道理を一つの御神訓に於て生ても死ても天と地とは我住家と思へよ。天にまかせよ。地にすがれよ。と教祖の神は教へ置て下されました。即ち天地乃神様は生死を通して吾等の大祖であらせられるのであるから、吾等は生死一如天にまかせ地にすがつて大祖神にお縋りしてそのお守りを願はねばならぬのである。生

みの子が吾が父よ、吾が母よと眞心を盡して頼り仕ふれば、親はあく可愛い吾が子よ、良い吾子よと悦び育み給ふこと同じく、天地の親神に眞心を捧げ、まかせすがりて信心すれば、可愛い吾子よ、良い氏子よと悦び守り給ふこと云ふのが金光教祖の道の立て方である。そこで大事な事は眞心と云ふものであります。親に眞心を盡して仕ふる孝行心が無かりせば、親子とは別れ遠ざかるやうになる。一家の内に同居して居りましても、親にして子に愛情薄く、又子が親に孝行の眞心がなかつたならば、同じ家に住みながら其の親と其の子とは遠く心が離れる。道遠く隔て、親子が別々に住居して居ても、吾が父如何に、吾が母如何に、其の子に眞心の一念あるならば、親子の身體こそ隔

つてをれ、其の子の心は常に親の許に通ひ、親の心は子の許に通ひて、恰も一軒の家に暮して居るごとく同じであることは、諸君の経験なきつて居られる事でありませう。況んや天地を見ざる所なく知らざる所なき我等の本體の大祖神に於ては、吾れ此所に眞心を捧げて居るならば、實に神様には遠き近きはな
い。然るに動もすれば、氏子が過ちて遠き近きのない神様の
上に隔を作り、中には神ご絶縁する者もある。この神様ご此
心ごを隔たしむるものは、畢竟我であり迷ひであるご教祖は
教へられて、神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ信賴心
に隔なく祈れご仰せられた。神は夜の晝の言はぬ。遠
いの近いの言はぬぞ。遠くなるのは、氏子の心に我ご迷
ひごいふ隔があるからである。猶云へば、我ごいひ迷ひご云

ふ隔ごは疑ひの心ご怠りの心ごである。眞心を以て神様を
頼り祈り、神吾ご共に在すご常に有難く思ふ人は、神様ご同居
して居る人である。頼む心に一點の疑ひなく、祈る心に一點
の怠りなく、眞心清く神様に仕へて居れば、隔はない。隔な
りせば、神様は遠い近いも夜も晝も、氏子を守るに區別は無い
この思召であります。
此の遠い近いご申しまするごは、道程で謂ふ一里よりも
三里が遠い、五里よりも十里が遠いご云ふ遠い近いではあり
ませぬ。十里よりも五里が近い、三里よりも一里が近いご云
ふ意味の遠い近いだけではありませぬ。尙ほ此の事を推擴
げて説くならば、近いごは此の世の事なり。遠いごは幽界即
ち死して後の事なり。併しながら、此の遠いご云ふ幽界も疑

ひなく怠りなく頼む眞心に一つの隔が無いならば其の遠い
幽界は吾と共に此所に在るのである。若し心の中に隔が生
じて来たならば此の幽界は實に何所に在るか尋ねて行くに
も涯ない遠きものとなります。眞心さへあれば此の死後
の遠き心得られる幽界は此の身此の儘此所に天地と共に
我等が體と共に此の近き所に在る。諸君。近い神様を遠く
せぬやうに我と共に在する神様と別れて住まはぬやうに致
しますのが是れが神人一致と申すのである。
是れより有難き御事をお傳へ申さん。それは教祖金光大
神が神一人一致の境に入らせられ生神のお手本を示し下
されたことであります。我が教祖は生神金光大神と申上げ
る。即ち御在世中生神様と申し上げたが今も生神金光大神

と日夜に稱へ申して居ります。ここは神人一致のお手本と立
たせられたからであります。教祖はその御信心によつて生
神の實證をお示しになり、そして吾等も亦生神となれるぞと
御教へになりました。吾々は教祖の神の如く、世界萬人が生
神と仰ぎ奉る程のものには到らずとも其の生神金光大神の
御教を吾等が眞心の底に藏むる時は、即ち教祖の神と吾等は
一致するのである。教祖の神と一致したる眞心は即ち天地
乃神と一致するのである。教祖の神は天地金乃神と一致せ
られて神人一致の道をお傳へ下されたので、其の教祖の神の
御教へ事を吾等が眞心の中へ藏むる時は、教祖の神と一致す
るここが出来、教祖の神と一致したならば、則ち天地金乃神と
吾等が一致することが出来るのである。世界萬人が生神と

申さなくとも、吾が心は生神となつてをるのである。此の中にも幾人か教祖の神と一致して居られる人が確かにある。本職の心眼にそれが認められます。又教祖の神の御理解に「相世掛代」と云ふ教を下されてある。相世掛代と云ふことは如何なる意味であるかと言ひますると、氏子の信心に依りて神の御徳は世に現はれる。そして又氏子は神の御徳に依りて助けられるといふことである。尙進んで申しますれば、此の尊き天地金乃神と云ふ御名は生神金光大神に依りて現はれたので、生神金光大神は天地金乃神の御徳に依りて、生神と進まれ教祖とならせられたのである。即ち神を離れて氏子は無し。氏子を離れて又天地乃神はあらず。神は氏子に依り、氏子は神に依り、互ひに相一致して其

の間懸け隔てなき所を御理解せられて「相世掛代」と仰せられたので、斯くも覺りて神人一致の境に進まんならば、教祖の神の御教へを眞の心の底に藏めることが肝腎である。即ち之れを藏めることが出来れば、教祖の神と一つになる。此の一致や前に申す通り、やがて天地乃神と一致することとなるのでありまして、此所に於て生きても死にても一筋となつて神と離れず、眞の廣き道に嬉しく樂しく暮すことが出来るのであります。五尺の體は日々勤め働き、身は汗水流しつゝも、其の心は教祖の神と共に悦び、天地乃神と共に樂しみつゝ、死生一貫安心立命の道が得られ行くのであります。皆さん信心を致しました所詮には、此所に到らねばなりません。此所に到りますれば、火に會うても水に逢うても、所謂水に溺

れず、火に焼けず云ふ信心が定め得られ、此所が定め得られ
ますれば眞實の大安心が出来て参ります。人云ふ者を神
から引下げて卑しいものにしてある教もあるが他の事を引
き来りてお話しする暇は無い。一筋に金光大神の道をお傳へ
すれば斯様な道である。東京は布教の行届きつゝある所で
ありますから、これまで信心をなされ、あの方面この方面と様
々に教を聴かれて、御承知の事であらんも、爰に始めて神人一
致と云ふ講題を設けて斯く説き来れば、人間云ふものは尊
いものであることが一層深く悟れたことと思ひます。此の
神人一致云ふ道理は天地の大理と云ふ小冊子を記念刊行
として當教會に渡してありますから御覽を願ひたい。新聞
の讀めるぐらゐの人は皆讀めます。これまで幾年か御信心

なされ、靈驗も幾度か受けられたるあなた方は、永き信心をな
されたる所詮には、教祖の神の教へ給ひし御教へ事を眞心に
藏めて、教祖の神と一つになり、即ち天地乃神と一つになるま
での靈驗をいたされたい。生きても死にても吾等は神人
一致である。吾等は神と一致することを得る尊きものであ
る。一段と信心を進められて此の世も先の世も打續きて、神
人一致の安心立命を得られ、死生一貫迷はざるこそ、信心する
ものゝ所詮は申すのである。
神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事
今晚は之で終りと致します。(拍手)

神に聲なし人に口あり

講題 神に聲なし人に口あり

(明治四十年七月三日 於金光教芝教會所)

ごなたにも能く御参詣になりました。本年四月十日日本部に於て御大祭を仕へ奉りました。節私心の裡に感じたことがあります。猶太神話にノアの大洪水と云ふ事が傳へられてをる。罪をつくつた者は其の洪水の爲に皆流されて仕舞つて、たゞ神の心に叶うた者が救はれたと申すのであります。それは世界中の大洪水だと書いてありますけれども、ごうも日本の國にあつたやうには思はれない。又其の時果して幾人の者が助かつたか云ふことも知れませぬが、今年教祖の神の二十五年祭が執行せられる年柄に向うて來た。我が金光教の内にも、ノアの大洪水が來るであらうと云ふ事が、御祭

の眞中に不圖思はれたのであります。それはごう云ふ意味
であるかご云ふご我が教祖の神が御口つから御傳へごを
お止め遊ばされてから二十五年を経た此の御年柄は心の曲
つて居る者は直くなり濁つて居る者は清くなり沈んで居る
者は浮ぶ歳であらう。同時に又曲れる者が直くならず濁れ
る者が清くならず沈みたる者が浮ぶごが出来なければ則
ちノアの大洪水の如くそれ等の人々は金光教の信仰界より
押し流される歳ではあるまいかと思つたのであります。
是れが議論上果してごんなものであらうなごご尋ねられて
も、それは分らない。議論でなく唯さう思つたのである、さう
思つたまでの事であるから當ることやら當らぬことやら眞
實を含んで居ることやら、含んで居らぬことやら理窟や議論

を離れて唯今年は我が信仰界の大切な御年柄であるご、範
雄一人の心の裡に確信して居るのでかくは思つたのである。
諸君に之からお話にするにも、此の心持を以て致します。左
様御承知を願ひます。

今日の講題は豫て揭示してあります通り「神に聲なし人に
口あり」といふのであります。此の講題による一座の講義は
初めて神語りますので、是れまで斯様な意味の講題を設けて
講義致した事はないのであります。此の度巡教を命ぜられ
ますや、この講題がフイご胸に浮んだのであります。それが
丁度當芝教會所の番に當つたご云ふやうな譯であります。
是れから神語り致しますが、その眞義を聞き取り得て下さる
ならば、眞に二十五年記念布教の有難さであるご思ひます。

偕ともて神かみ様さまは人間にんげんの如ごとく眼めに見みえませぬ。眼めに見みえ給たまはぬ
によつて吾われ々の耳みみにて聽き取る御かみ言ことば葉はごてもない。然しかれども
神かみの御かみ聲こゑは神かみの氏うぢ子こたる人ひとの口くちにより傳つたへられ、そして人ひとの
耳みみに移うつしてこれを聽き取とらしめ給たまふごいふのが、即すなはち神かみに聲こゑな
し人ひとに口くちありと云いふ意義いぎであります。神かみに聲こゑなきは、人間にんげんの
如ごとく斬きれば血ちの出でる肉にく體たいを御かみ持もち遊あそばされぬからである。
然しかれども我われが天てん地ちの神かみは人間にんげんの善よ惡わるは固まより、事ことの是ぜ非ひ正せい邪じや、
嬉うれしい事ことも悲かなしい事ことも皆みな御かみ承しやう知ち遊あそばされてある。此この御かみ德とくを
大神おほい靈れいご申まを上げます。吾われ々々人間にんげんは此この大神おほい靈れいより出いたるも
のゆゑに、小せう神しん靈れいご申まをします。此この小せう神しん靈れいたる人ひとが口くちにて物もの
を言いひますれば聲こゑごなりませぬ。其そのの聲こゑが次つぎの人ひとの耳みみにうつ
り、それが心こゝろに收こままつて、神かみの道みちも人ひとの道みちも知しるごが出來でる

のであります。大神おほい靈れいたる我われが天てん地ちの神かみ様さまは小せう神しん靈れいたる吾われ
々の口くちにて、神かみの御かみ心こゝろを語かたり得えせしめらるるのであります。
然しかれども一般いぱんの人間にんげんは、小せう神しん靈れいの性せい能のうを具そなへながら、未いまだそ
の自じ覺かくに達たつせぬが故ゆゑに、大神おほい靈れいたる我われが祖おや神かみ様さまを肉にく眼がんを以もつて
見みやうごしても見み奉まうるごが出來でない。その御かみ聲こゑも聞きかれ
ない。そこで疑うたがひを起おこす。それが爲ために小せう神しん靈れいごして大神おほい靈れい
に近か寄よつて御かみ蔭かげを受うくべき者ものが、其そのの御かみ蔭かげを取とり外はずす。これ
を不ふ憫みんご思おぼ召めしされて、我われが教けう祖その神かみは、神かみは聲こゑもなしかたちも
見みえず疑うたがひは限かぎりなし恐おそるべし疑うたがひを去されよと教おしへられた。如ごとく
何なにに議ぎ論ろんをし理り窟くつを申まをして神かみを認まめやうご致いたしても、肉にく眼がんを
以もつて神かみ様さまの御かみ姿すがたを拜はいするごは出來でない。出で來きないが故ゆゑに
疑うたがひを起おこすならば、それは限かぎりのないごである。神かみ様さまは吾われ

八四
よく見奉るこの出来ない貴い有難さ、吾々以上の御力と
を持つて在はすのであるから、そこを恐るべし疑を去れよと
教祖の神が御教へ下されたのであります。神様には吾等の
如き肉體がおはさぬ故に見奉ることを得ず、御聲が無い爲に
聞くことを得ずと云ふので、それを疑ふは例へて見ますれば、
吾等の靈魂たまひを疑ふのと同じであります。吾がたまひ
ひは如何なる物か、如何なる姿をして居るか、と云ふことは、吾
が眼を以ては見られませぬ。それでは吾がたまひひはない
か、といへば、自分にはたまひひは無いといふ者はありますま
い。それと同じ道理になりませう。
大神格の天地乃神の御聲を神の口より聽かうとしても、聽
くことは得ないけれども、眞理の上にかきましては神の御聲

を聽くことが出来るのであります。眞理の上に於て神の御
聲が聽かるゝことは何ういふことであるか。教祖生神金光
神が肉體であらせられて、その御口より語らせられた神語り
の御聲は、二十五年來聽くことが出来ません。けれども其の
眞理に於ては生神教祖の御聲を聽き奉るることが出来ます。
今謹んで神誠神訓等を承はれば、その御聲は即ち生神教祖の
御口より傳へられた御教である。こゝに私が口にて神誠神訓
を捧讀いたしますれば、是れ即ち恐くも生神教祖の御聲とな
る。而もそれは同時に天地乃神の御聲であります。是れ即
ち神に聲なし人に口ありといふのであります。こゝに神様
の道の神語りを致しますれば、それが即ち教祖の御聲であり、
大神の御聲である。恰も蓄音器に依りて亡き人の聲を聽く

のこ異なる所はありませぬ。教祖の神の御聲は蓄音器にこつてはないが、神誠、神訓となつて世に傳つて居る。誰が口に語るも御神訓は恰も蓄音器にうつしてあるが如く聽かれるのである。こゝに諸君と共に道の話をして致しますれば、それが教祖の御理解であり、大神様の御裁傳であります。是れが神に聲なし人に口ありご云ふものである。神様の御話は身分の高き者が致しますのも、身分の卑しきものが致しますのも決して違ふものではない、神様の道の御話は、無學者が致しまするのも、學者が致しまするのも、智者が致しまするのも一つである。道の御話である限りそれは取りも直さず教祖の神の御聲であるご云ふことを皆心に收めなければなりません。人爵の上の高きご低きごに依りて、眞理や教理が或は高く或は低く

なるのでは決して本當の眞理教理ではありません。故に誰の口から神様の御話を聽きましても、貴き天地の神様の御神意である。教祖の神の御聲であるご、謹んで聽くべきであります。又如何なる所に於て神語りを致しまするのも皆一つであります。千木高き宮の御前に神語りを致しまするのも、廣き御廣前に神語りを致しまするのも、賤が伏家に於て神語りを致しまするのも、野山に腰掛けて神語りを致しまするのも、信の心を以て神語る時は、均しく天地金乃神の御聲、教祖金光大神の御聲となるのであります。金光大神の御聲となつて居るから、そこに御蔭が現はれるのであります。教祖の神は此の道は祈念祈禱や禁厭で助かる道にはあらず。道の話をして聽かせよ、助かるご常に御理解下された。

此の御理解の「助かる」といふのは、御蔭を蒙られるといふ御神意である。道によりますと、さまざまの儀式によつて御祈禱をし、又さまざまの儀式によつて禁厭をして、人を助けること云ふやうな道もありますが、それは其の道の立て方で、我金光大神の教へ下された道は、祈念や祈禱禁厭で人を助けること云ふやうなお道の立て方ではない。萬物の靈長神の氏子たる此の人間の口によりて、口から口へと相傳へ語り傳へて話をし、心の裡に信を修むれば、そこに御蔭が現はれて助けられる道ぞと教へ下されたのである。然し人の御蔭を受けた話を聞き、ますますにも、教祖の御言葉の取次ぎを受けますにも、其の人其の人に、よりまして皆悟りどころが違ひます。教祖の御教を聞き、御蔭の實例を聞いて、心の中に得心がゆき、眞に難有しこ

思ふ心が起きたならば直ぐに靈驗が受けられる。祈禱や禁厭で助かる道とは違ふといふのが、金光大神の御教の御趣意であります。

そこで、神の御前は廣前にあらず。また社の前にあらず。如何なる場所に於ても、道の話をして聞いて、眞に難有と感ぜられた其の時に御祈念成就すこと云ふのが、金光大神の道である。之をよく心におさめておきたい。

「口は禍の門、舌は禍の根」と申しますが、人の口は使ひやうによりましては禍の門ともなり、舌も動かしやうによりましては禍の根ともなります。萬物の靈長たる人の口を禍の門とするのは如何にも口惜しいことあります。眞の道を語り傳ふべきこの貴き口を不淨の口、禍の門に致したくないも

のであります。一命にもかゝはる危き場合に於てすら、一心の信を語るここによつてその身が助けらるゝ程の貴きこの口を禍の門や禍の根たらしむるご云ふことは、如何にも残念なことであります。私も知情意の作用を持つて居る人間でありますから、折々心が平かでない時があります。其の時には謹んで神誠を捧讀し、正傳を捧讀し、御神訓を捧讀いたします。するご不平も、不愉快も、疝癢も、何時の間にかさらさらご去つて仕舞ひ、今迄むら／＼ごしてゐた心の雲が晴れて氣分が清々ご致します。諸君方にもさう云ふ御経験が多くあらうご思はれます。是れ即ち天地乃神に御口は無きが故にその御聲は直接に聴く事を得ざれごも、御肉體を隠し給へる教祖の御聲は聴き得ざれごも、神誠神訓を捧讀する私自身の口

によりて、天地乃神の御神意たる御聲が、生神教祖の御教たる御聲が吾ご吾が耳に入るが故に、不平不満、不愉快、疝癢などの邪心が祓ひ清められるのであります。かく説き來りますれば、神の御聲無き爲に迷ひを起すご云ふことは、未だ信心の薄い爲である事が分りませう。尙繰返して申しますれば、本職がこゝに心を清め氣を鎮めて神語を致しますのは、即ち生神教祖の御聲の一つであります。すが前に申した通り、人の口は、天地の大神靈より出でたる小神靈の口である。かく貴い口であるから、平常然程に思はぬ人の物語ることであつても、或時は其の一言の言葉が眞に神の御教か、將た教祖の御理解かと思はるゝばかりに聞ゆる事があります。子供が語る一言さへ、神の御聲教祖の御理解ご

思はれる時があります。さあ此の時である。吾等信心して居ります者は、斯かる時、「神に聲なし人に口あり」と慎む所がなければなりません。常に心を清く鎮めて、神様の御話を油断なく心に収めたい。と思つて居ます。何のあれが云ふ様な人の口から出た事でも、あゝ油断がならぬ、あゝ恐入つたご頭が下る様な事がある。故に教祖は常に、人を輕しめてはならぬ、人を輕しめるご靈驗は受けられぬご教へられました。眞に「神に聲なし人に口あり」であります。信心する人の謹んで用心せねばならぬ事でありませぬ。斯く考へて見ますれば、實に人の口は禍の門にあらず。人の舌は禍の根にあらず。神様の御聲を傳ふる門である。人の口は誠に尊いものではありませぬか。況んや此の大廣前にて諸先生達がなさ

る神様の御話におきましては、うかくと聞き流さるべきものであります。そこで物は語りやうによりましては貴くなりますが、又聞きやうによつて貴くなることを心得ておかねばなりません。之に付いて不用意に申した事で、大層人を悦ばせた實例を御話致しませう。去る三十六年の事でありました。神戸の兵庫町の教會に参りました時、今はその名を忘れましたが、五十二歳になる婦人が、私が二日はかり居ります間、晝夜出て給仕をして呉れました。その人は神經質のやうに見受けました。其時五十以上六十位になるお婆さんが三人出て同じく給仕をして呉れました。所が其の五十二歳になる婦人は美人相で若く見えるので、わらい若い質ちやと言つて居つた。

九四
するこそその中の一番老人の一人が「貴女は幾つにおなりなさるか」と二度も三度も問ひかへされても其の婦人は「幾つに見えますか」と答へて年を申しませぬので、今申した五十二は後日に聞いたのであるが、私は何心なく「此の人は若う見えるが七十二ちや」と云ひました。元より冗談である。五十二を七十二と云うたのだから、誰が聞いても冗談であることは分る。所が其の婦人は「難有うございます」と云つて手を拍つて居る。合點いかぬ事であると思つたが、其の夜はそれぎり濟んだ。翌朝になるに外二人は來ても其の婦人は參つて來ない。昨夜の冗談が氣に觸つたのであらうかと云つて居るに其處へ「つい朝寢をして遅れました」と云つて參りました。六十恰好の婦人に向つて「どうか喜んで下さい。妾は昨夜眞に御蔭を受

けました」と話し出した。どうしたのかと訊いて見ると、妾は死ぬると云ふ事が怖くて、寢ても覺めても死ぬ事ばかり思はれて夜も寢られないのでありましたが、昨夜先生から七十二ちやと云はれ、妾は七十二までは確かに生きられると思ひまして、昨夜は安心してよく眠られ今朝は夜の明けたのも知らず寢ました」と云ふのである。私はこれを聽いて驚いた。あゝ物は悟りやうである。自分は何心なく七十二と云うたのであるが、死ぬる事ばかり心配して居つた人が、それに暗示を得て、七十二まで生きる覺悟を決め、いつ死ぬか、いつ死ぬか、今夜も安眠出來なんだ者が、生きられると云ふ覺悟が出來、今に活きて居ります。逢ふ度毎に「先生有難う存じます。長命をさして頂きます」と言うて悦んで居ります。何も私が長命を

九六
さしてやるのではありませんが、先方の聞き様で善きに悟り
確かに生きられると覺悟して、心が廣くなつたと安心して居
る。實に一言の言葉もその人の心の悟りやうであります。
私は無意識に云つた事であるなれど、左様に有難く聞えた事
は、或は教祖の神が私の口をして語らしめられたのであつた
かも知れないと思はれます。私の口が左程に貴く、然程に御
徳がある譯ではないが、其の一言が、今まで死ぬる事ばかりを
氣にしてゐた人を、七十二と云つたのを、七十二までも生きる
と感じ、二十年も長く命を延ばし得させて貰つたと安心に導
いた事は、是れ「神に聲なし人に口あり」ではないかと、私自ら有
難く思つてをる事でもあります。
そこで、神の道を聴くのは、惡しきに聴かず善きに聴け。物

九七
は見直し、聞直して、善きに聴いて行くなれば、人の口ほど貴い
ものはない。此の口を禍の門として、そこから惡鬼を出さぬ
やう、神の御前にひれ伏して信心する人々の口からは、貴き神
様の御言葉が出るやうに使ひたいものであります。人を傷
つけるやうな惡口は、言ひ易く、人を助けるやうな善い事は、云
ひにくいものであるとせず。人の惡口や人を傷ける事は、云
ひにくい。人を助ける事は、言ひ易いものであると云ふやう
に、神の氏子たるお互のこの口は、神様のお使ひを致す口であ
る。人も喜び、自分も喜ぶ働きをさせたいものであります。
神様の御姿が見えない、御聲が聞えないから、とて油斷はな
らぬ。其の油斷は、神様と吾との間に隔てをつくる。それで
は、御蔭は蒙られぬ。信心する人は、常に教祖の神様の御聲を

九八
聞かんことを心がけ、謹んで神誠神訓を捧讀せられよ。教祖
の神の神誠神訓は即ち天地金乃神の御聲である。其の教祖
の神の神誠神訓を捧讀する便宜の爲に、今年我が本部に於て
は記念刊行物の一として、「金光大教」も「天地の大理」も一の小
冊子として、夫れく教會所に配付になつて居りますから、皆
様は手易く拜讀する事が出来ます。常々之を拜讀します
るならば、不平も煩悶も必ず去る。苦痛も心配も必ず退く。
讀むに従ひて一段々々々悟りは深く、次々々有難さが増し、吾
が口に語りながら吾が耳に神の御聲が聞え、斯くの如くして
一歩々々生神教祖の御教の手綱に引よせられて、明かに廣げ
き道を廣く履み行きつゝ、生きても死にても天と地とは我が
住家と思はるるまでに安心幸福の御蔭が得られます。教祖

の神の御聲今は無しと思はうてはならぬ。天地乃神に御聲な
しと疑ふべきものではありませぬ、貴きは人の口なり人の耳
なりとの心得こそ誠に肝要であります。
(拍手)

信
心
相
傳
訓

講 信 心 相 傳 訓

(明治四十年七月三日夜
於金光教芝教會所)

諸君にも……

今晚はお約束申した通り、信心相傳訓といふ講題によつて神語致さうと思ひます。信心相傳訓と申しますのは、一言にいへば、お互に貴い道の信心をさして戴きをりますが、之を吾が一代限りにならないやう親は子に、子は其の子に、眞の道の信心を子々孫々に傳へたいといふ意味であります。併し信心と申しましても、迷ひ信心、所謂迷信、盲信は別物であります。すが、何れの道に致しましても、信心をするといふことは、其の源を討ねて見ると必ずや其の理由がなくてはなりません。その理由が機縁となつてその道の信仰に入るのであります。

て、これを御神縁と申します。そして其の理由をあげて見れば、

一、其の道ご己れの主義ごが合うて居るか
 一、其の教ご己れの希望ごが合うて居るか
 一、其の家の状態が其の道に依つて救はれねばならぬ理由に迫られたか
 一、其の人の事情が其の道に入らざるを得ない境遇にありしか

少くとも此の四箇條位の理由がなくしては信心を初めるものではない。凡そ何等の道に入りますのでも眞の信心正しい眞理ある道に入つて其の教を聴き、其の神の加護を蒙ることいふことは、吾は知らずとも、其の神ご吾との間に機縁即ち神

縁があるからで、この神縁の結ばれるには、そこに何かの原因がある。教祖の傳へられた道の教ご常に己れの主義ごし精神ごする所従つて己れの行動ごが相合する所があつて入るごか、斯の道が己れの常に希望し求めて居る理想ご相適うて居る所があつて入るごか、又一家の中に不和があつて、父たり母たる者がその子のために苦み、子が父ごか母ごかの事情のために悩むごか、兄は弟、弟は兄のために苦痛を感ずるごか、妻は夫のために、夫は妻のために煩悶するごか、一家の經濟上の事からか、或は家族の病氣からか、逆も自分の力には及ばぬ、神徳を蒙つて救うて頂かねばならぬごて信心を始める者もある。又其の親類、其の朋友、其の知人が斯の道の信者で、それ等の人に導かれて斯の道を知り入る者もある。或は自分の事業の

一〇四
失敗のため、身の上の不遇のため、その困難の境遇から道に導かれる者もある。以上擧げて説明せし如く、凡そ信心に入るには、ふと飛込んでスツと出るやうな調子のもではない。少くとも右申した四箇條位の理由から道に入る神縁を結ぶのである。

横しまの道に入りますには、人が教へて呉れなくても、人が導いて呉れなくても、其の境遇に迫られなくても入り易いものであるが、正しき道には入り難い。併し眞實に道を求め眞劍に救はれたいと神縁あつて眞の道に入つて来て眞の教を聽くならば、その教は次々と本心に收まつて日々有難さが増して来、段々と御蔭を蒙つて助けられもし、救はれもし、益々一心の信心が高まつて行く。高まるまゝに有難さが忘れられ

ず、彌々本心の玉が磨かれ、信念が堅固となつて其の道に進んでゆくのであるが、今日は斯の道、明日はあの道と、轉々と取替へ引替へるご云ふやうなことで眞の道が得られるものではない。堅固な信念を得るまでには、兎もするご悪魔に誘はれて、横の道へ外れて行き易いのが迷ひの多い人間の常態であります。それ故に之に打克たなければならぬ。信心には修練が必要で、その修練を積み、幾度か身にも心にも現實の有難き御蔭を蒙り、貴き御神徳有難き御教を身におさめまして、其のおさめた信心を己れ一代限りとするごは誠に惜むべきことであるばかりでなく、死して靈神となり安んずべき道を失ふのであるから、一度得たる眞の道は、子々孫々に傳へ傳へて斯の道の絶えないやうに相傳を致したいものである。

即ち教祖の神は

「眞心の道を迷はず失はず末の末まで教へ傳へよ」

ご御神訓遊ばされました。結構な御蔭を頂き、斯うして神の

光神の御徳を心にも身にも受けて居る吾が眞心の道を一代

限りになしないう末の末まで教へ傳へて、其の行末の靈神も

斯の道と共に光を放つやうにせよこのことでありませぬ。

所で「眞心の道」はごう云ふ道であるか。そは生神教祖の

立て給ひ、教へ給ひたる天地金乃神の大道である。之を眞心

の道と御教へ遊ばされた。言葉を換へていへば私共の信心

の道である。「迷はず失はず」は前にも申した通り、正しい眞

の道を辿りつつ居りましても、動もすれば悪魔が遮つて悪道

に誘はんとする。其のために眼を眩まされて横の道へ迷う

て行く。又迷ふから行先が暗闇となつて何の道が眞實の道

やら分らず、遂に行詰つて道を失ふこととなる。それでは今

まで蒙つてゐた神の光、神の御徳が消えて御蔭を落して了

ふ、それは取返しつかぬ残念な事である。それ故先づ自分

に眞の道をこり外さぬやうに堅固な信心を持ち續けること共

に、末の末までも子々孫々に教へ傳へて行け、此生神教祖の道

は家も榮え子孫も榮ゆべき一家繁昌を教へる道であること仰

せられたのである。之は眞正面から縦に解釋したのであり

ます。之を横に擴げて見れば所謂目出度目出度の若松さま

よ枝も榮える葉も繁る」といふが如くに、枝から枝、葉から葉と

世間の人々に斯の道を教へ傳へて行かねばならぬ。教祖は

常に我々に「おかげを受けたら知らぬ人へ受けたおかげを話

金照明神が一番始であつて吾々のみならず他の者も承はつて居る御理解であります。此方は一代佛を嫌ふぞこの御神意は何うであるかと思ひます。金光大神が教ふる道は子孫繁昌家繁昌の道を傳へて居る。妻帯せねば子孫は無からう。子孫がないなら吾れ以下の肉縁はなからうこの御神意である。僧侶は今妻帯の禁制を解かれたが昔は御承知の通り一向宗を除くの外は妻帯出来ぬことなつてゐた。如何なる名僧智識と雖も妻帯せぬから其の子孫に道を傳へて悦ぶと云ふことは出来ない。即ち一代佛である。金光大神の道は子孫繁昌家繁昌を願ふ道であるから妻帯禁制の如きは金光大神は嫌ひ給ふのである。其の修行といふものは妻があつても邪魔にならず。子があつても邪魔にならず。妻を

娶つて人情を知り子を持つて人情を知り其の間に於て心行を成就して家内和合家業繁昌子孫繁榮して行くのが金光大神の道ぞと仰せられたのであります。前來述ぶるが如く僧侶には妻が無いから子孫もない。昔のまゝなら子はない。有つたらそれは間違ひである。従つて佛敎に於きましては一向宗を除くの外は我が子に其の精神を傳へると云ふことは出来ない。そこで法脈と申しまして弟子小僧に己れの信念を傳へて相續さす。又僧侶其の者には親も兄弟もあらう。伯父伯母もあらうが我が子孫に對しては親類と稱すべきものがない。そこで寺々が交際を致しますのを法類といひます。吾々であれば親類といふのを彼の方では法類といふ。佛敎に於ては斯ういふやうにして居

るが、我教祖の御教は、子々孫々の血脈を傳へるご共に信心を
も相傳へて、子々孫々永久の榮えを願ふのである。吾等には
血脈血統上子々孫々あり。親類ご稱すべきもあり。相傳へ
相傳へる事が出来る。又法脈法類の如く、世界の人類に向つ
て、己れの信念を傳へ信脈を傳へる事が出来る。これが末の
末まで教へ傳へよこのことであります。
以上傳へ來りまして更に考へますれば、本年は教祖の神が
御身自ら神語りを遊ばさるゝことなきに至つてより二十五
年ごなりました。教祖の神が神隠れ遊ばされた二十五の昔
を偲びまするご、其の當時信者も數多ありましたが、僅に四人
の者が裝束を着けて御葬儀を仕へ、木綿崎山に隠し奉つた事
であります。所が其の後二十五年を経來る間に、裝束を着け

て教をする人一千有餘に殖え、金光大神の御名を唱へるもの
約百萬人ご申すのである。是れ眞心の道を迷はず失はず末
の末まで教へ傳へよご御神訓遊ばされたる御神意が、横へも
縦へも末の末まで傳はり擴がりましたる證據であります。
本年は二十五年間の神恩拜謝のため一念を籠めて居ります
。皆様はこの二十五年の間に於て御神縁を蒙り此の眞の
道に入らせて頂いた方々であります。斯の道の開け行きた
有様を具さに申上げらるゝ御祭に、吾は漏れじ落ちじご今よ
り樂しみ待たれんことを願ひます。殊に今二十五年ごいふ
ことを語り出でましたについて思出らるゝは、今は世になき
人であるが、當芝教會長たりし大場氏は、教祖の神が神隠れ遊
ばす年、即ち明治十六年の六月十日に、大阪なる白神、近藤兩氏

のお供をして教祖の神の御許に参られ、範雄歸郷中であつたので、その御許しを得て、郷里備後國まで訪ねて來られたが、教祖の神は其の年十月神隠れしましたのである。見渡しますれば、大場教會長の御存生中より信心を續けて居られる信者も多々あるやうであります。來る十月九日十日には、大場教會長の靈神を背負うて、木綿崎山に參る集つて、神恩拜謝の詞を申上げて貰ひたい。

吾等が教祖の神様へ御恩報じを致しまするには、其の仕方が數々あらうと思ひます。道の行末の爲になるやうな事柄を企て、又人を導く手段も様々あらうと思ひますが、教祖の神は、未だ世に教へたる者もなく、曾て聞きたる事もなき神の御名を傳へ給ひ、吾等に斯かる貴い神の御威徳を知らして下

されました。教祖の神なかりせば、天地金乃神の御名も知られず、吾々も御蔭を受けることはないのであります。其の教祖の神の二十五年に相當する記念の年でありますから、各自心を新しくして、吾が子孫は申すに及ばず、東西南北人といふ人に此の貴き神の教を知らしめるやうに努めることが、最も記念に相適はしい事でありませう。我が一代だけでなく、死したる後の行く末まで、又吾一人だけでなく、世間の見も知らぬ人々まで、金光大神の御教の光を傳へ、天地金乃神の御名をたへ奉らしめる事は、眞の道を信する信者たるもの、正に盡すべき道、又御恩報じの道と申すものであります。(拍手)

精神修養は成功の母

講題 精神修養は成功の母

(明治四十年七月五日
於金光教白金教會所)

諸君にも……………

此の度は教祖二十五年記念布教の命を受けまして、本職の務めましますのは當市内僅に五ヶ教會で、今日は晝夜當教會、明日は日本橋教會で晝夜開教して命を終る豫定であります。

今日此の席は「精神修養は成功の母」と云ふ講題となつてをります。その意味の大畧は總て如何なる學問を致しますにも、事業を成しますにも、一つの目的を立て、それを成就するに就きては、よく困苦艱難に耐へ、之を成し遂げる鍛錬が出来てゐませぬ、其の目的を成就することが出来ぬ。其の精神を鍛へることが目的成就の母であること申すのであります。

人の母が懐妊しまして子を産上げ其の子を成長せしめて一人前の人と育上げるまでには容易ならぬ苦勞が要る。丁度さう云ふやうに、一つの事業を思立つてそれを成し遂げ、それを成就させるには並々ならぬ努力を要するが、それは精神の修養が本であること云ふ意味であります。

さて人間の此の體ご云ふものは食物を入れませぬと生きて居れませぬ。一日食はざれば直ぐに弱りを來します。健康な身體を作り十分に働きますには相當の食物をよい加減にこり入れねばなりません。それと同様に、此の人間の心、精神にも食物を與へませねば精神が健全に働きます。身體の食物は形ある物を食べまして之れを養ひますが、精神を養ひますには米や麵麩や魚では養ひにはならぬ。そこで何を

食はせたならば精神を養ふここが出来るか。形の無い心に向つてであるから形の無いものを與へなければならぬ。其の形の無い物を與へるごして何を與へるか。それは眞の道、神の教ご云ふものを與へて行くに如くはない。所が其の精神の食物は金で買ふ譯にゆかぬ。謂はば只で得られる。けれども米や魚ならば金を持つて店へ行けば直様呉れる。是れを腹の中に入れては直様腹がふごりて行くが眞の道、神様の教は店先で買ふご云ふ譯に参りませぬ。金は要らぬが精神の食物は普通では得難い。いざ是れより教祖の神が精神に與へよごて下された食物の膳立てを咄ませう。

先づ其の食物を食べるには食べる用意が要ります。その第一は「若い者は本心の柱に虫を入らせなよ」この御神訓であ

ります。是れが精神修養には最も大切であります。是れは
一言に申しますれば克己の訓であります。人間と云ふ者は
事に觸れ物に當りて善き方へは移り難く、悪い方へは移り易
い弱點を持つて居る。その弱身の周圍に澤山の蟲が附き纏
うて居る。併しこの蟲と云ふものは他から這うて來るので
はない。己れの精神の緩みの穴から這ひ出て來る蟲である。
又不行狀から身邊に附き纏うて來る蟲である。此の蟲を征
服するは亦他の力では出來ない。其の征服の武器を克己と
云ふのであります。克己とは文字の通り己れに克つと云ふ事
で他の言葉で云へば吾が心の力で吾に克つのである。此の
心の力がなくば、若い者は用心せぬと此の蟲が本心の柱に喰
入ります。此の若いと云ふ言葉には様々な意味があります。

若いと云ふのは丁度此の頃熟れて居ります。桃の未だ青い間
のやうなもので、熟れぬ間は桃をむがうと致しまして、未だ
熟れが若いと云ひます。肉も熟れず、核も固まらず、未だ青い。
それ故年の若い、未だ思想も定まらず、世の中の事も分らず、意
志も定らぬ若い人を青年と云ひます。青い人、熟れて居らぬ
人と云ふ意味である。又之を信心の上から考へて見ますと、
年はとつてゐても信心の若い人がある。それも「若い者」であ
る。信心の若い人は信心に迷ひが起り易い。物に惑ひ易い。
信心はしてゐても未だ信念が固らぬから、用心せぬと心の緩
みや不行狀の虫に心の柱が喰はれ易い。此の家の柱に、虫が
這入つて居れば、いつ大風に倒されるかも知れない如く、人は
善い面の皮を着て居つて、然るべき人なりと思はれて居ても、

心の中に虫が入つて居つたならば、其の人は何時其の身體を
亡ぼすことになるかも知れない。信心はしてゐても眞の道
をこり外し、御蔭を落すこととなります。そこで此の心の柱
に虫を入らせなよと仰せられたのであります。それ故此の
虫に喰はれないやうに常に我情我慾に打ち克つ勇氣、氣力を
養はねばならぬ。それが精神修養である。お互は自分の信
心と神様の加護によつてこの克己の氣力を心に貯へねば
ならぬ。それが信心の修行であります。
又教祖は「信心は本心の玉を研くものぞや」と教へられた。
これが膳立の第二である。本心の玉は吾が魂のここであ
る。魂を研くのは信心の目的である。人間は萬物の靈長、神
の分靈にして、これを小天地と名づけ、本來大天地の眞理を知

り、物の道理を見分け得る本心を持つてをる。されども本心
は曇り易く、汚れ易く、魂の光を失ひて天地の眞理から遠ざか
り、物の道理を見誤り、あの人のする事は人間らしいやないなご
と云はれ、天地の道を離れ人の道を外してゆく。太陽の光な
くば世は闇黒である。闇黒では道は分らぬ。又危険である。
石にも躓づく溝へも落ちる。生命を失ふこともある。本心
の玉光なくば心は闇黒である。道を誤り道を外すは當り前
である。信心は常にこの本心を磨いて神の御光を受け輝し、
神徳人徳を併せ頂くが信心の極致であります。即ち人間ら
しさが神らしさになるのが信心の目的で、神らしさは即ち
生神となることでもあります。こゝが信心の一番有難い所で
あります。それ故信心致す者は一心をこめて神様を信仰し

本心の玉を研く用意を怠つてはなりません。

そこで其の本心の玉の光を輝かすために教祖の神は又眞の道を行く人は肉眼を置いて心眼を開けよと教へられました。これが膳立の第三であります。眞の道は金光大神がお開き下された天地の大道であります。肉眼はあなた方も吾々も額の下に持つてをる此の見る眼である。此の眼は不淨を見れば直ちに心に不淨を傳達し、清きを見れば其の清きを傳達する。美しきも汚きも大きい小さいも皆これを見分けて行くのが此の肉眼であるが、肉眼を以ては人目一里さか申してそれ以上の遠方は見られないばかりでなく、天地の大道を見、生神教祖の眞の道の尊さを見ることは出来ません。それを見る眼は心眼即ち心の眼であります。物事の善悪が分り、

これは道に合つてをる、これは道に合つてゐない、これは神様の御心に叶うてをる、これは御心に叶はぬといふ見分けをするのが心眼である。肉眼はたゞ物の表面だけしか見ぬ。心眼は物の中事の奥底を見通す眼である。信心は姿のない神様を見まつりてその御光を受けることである。修養は形の無い眞の道を見分けて自分の徳を積むことである。それ故眞の道を行く人は形あるものしか見ぬない肉眼を置いて、形なきものを見る心眼を開かねばならぬ。

そこで、本心の柱に虫を入らせぬ用心をし、本心の玉を研く覺悟が出来、心眼を開いて眞の道を討ね進む用意が調つたらば、それで精神修養の膳立が出来上つた譯であります。その上に列べられた食物を自由に食べるここが出来ます。即

ち教祖の神の教へ給うた神誠神訓は悉くその食物でありまして、その一つ一つを精神の腹に收める毎に精神は太つて行く。併し食物は腹に入れる前に口に入れて齒でよく噛みこなさねばならぬ。そのやうに精神の腹に入れる前に頭でよく噛みこなさねばならぬ。即ちそれを心を錬り鍛へると言ひます。錬り鍛へるは刀鍛冶が鐵を火にしては鋸で打ち、打つては水に漬け、水に漬けては藁灰をかけ、又火にしては打ち、火にしては打つことで、かくて錬上げ鍛上げた物が正宗の名劍ともなるのでありまして、信仰も斯の如くに神誠神訓が吾身吾心に錬り鍛へられ、惡を責め我慾に克ちて不動の心を養ひ、善を追ひ清淨を求めて其の徳を進め、益々勇猛心を以て信心の奥道に突入つて參らねばなりません。信心をして神

様の道を究めまするには、夢の間にもこの精進の工夫をする考へが無くてはならぬ。範雄の昔話の一をお聴きに入れませう。

明治十二年の秋の或夜の事で、教祖の神お隠れ遊ばさるゝ五年前の事である。其の時分は範雄が二十四歳の時で、熱心に信仰して多くの人の願ひのお取次をして居りました。お道も今の如くではありませぬ。教祖の神を大谷の金神狸であるなごゝ惡口を言ふ時で、自分も親族の者から斯う云ふことを言はれました。範雄の家の屋號を店と云ひましたが、店のは困つた事を仕出して呉れた。あんな流行神を信仰して呉れては困る。後で親類の中を崇りまはる様なことがあつては困るご申しました。所が範雄の兩親は、神でもよい佛で

もよい人を助ける者に成るならば、僅かなれど有るだけの力を添へてやる。斯う云ふのが兩親兄等の願ひであつた。云ふのは、私が幼少の時より凡そ病氣と云ふ病氣に罹り災難と云ふ災難を受け、謂はば吾一身は此の世のものでない云ふ程であつたのが、身體も健康となり、そして後斯の道の事を知り、斯の道の信心をする云ふことになつたのであるから、兩親始め兄二人も悦んで汝の體が人を助ける身になつて呉れば、是れ以上の願はないと申され、一家の心が打揃うて居りますから、親族の者が如何様に云ひましても少しも動かない。詣來る人は一日に二百三百と云ふ人で、是れにお取次をして居る。實に楽しく思つて居た。其の十二年の秋の夜、十二時過ぎて寢に就きました所、夜の引明に近く、最早朝の神

拜に起きねばならぬと云ふ頃まで、終夜と申してよからう、三疋の大きな狐が入替り立替り、範雄の左右に來る。私は得物を持つて其の獸と闘つた。此の狐三疋を平らげねば我が信仰の邪魔をする。悉く斬捨てよう、前となり後となり吾れに向つて來る狐と懸命に闘つた。我が信仰を妨げる魔物である。一匹も残さず斬倒さうと一念籠めて將に斬り下さうとして、はてな、生物を殺して終はねば信心の妨げになることは如何の事であらうかと思つた時、ふと眼が覺めた。今まで狐と闘つてゐたのは夢であつたかと熟考へました。親族の者の中に信心を妨げんとしてをるものがある。山伏などは乗りつけ祈禱に託して至らざる所なき惡口を申してをる折であります。それ等の者は狐となつて私を苦める。苦みこは、

闘はねばならぬが殺すことは無用である。此方の信念を以て降伏すればそれでよい。かく覺る所があつて、不徳の者でありますが、今日に至るまでの間種々様々に信念を以て闘つて来た。信心する者は、夜間寝て居ても、其の夢の間にも勇往邁進の精神の向上に努めねばならぬ。さなくば眞實の精神の修養云ふものは出来ないのであります。

精神の修養があるかないかは事のある時でなくては分りませぬ。口で言うたばかりでは役立ぬ。精神修養は理窟ではない。議論ではない。又文字によつて學ぶ學問でもない。實踐躬行である。故に熱心と堅忍を以て實地實際を踐み行はねば駄目である。例へば「腹立を抑へる事」は精神修養の食物として最も滋養に富んでをる。只今我教祖の神誠第七

條の正傳を捧讀するからお聴取になりたい。

腹立ば心の鏡のくもる事

本條の正傳は心は常に大磐石の如く押鎮め事に觸れ物にあたりて一旦の腹立に我本心を紊し惡しき心になることなかれとなり。

是く大きな磐石の上に我一心を押し据ゑたる如く、此の精神を下腹端座と申して下腹の底へ押鎮めて、押せごも動かさず、引けごも揺るがず、腹立のために本心を取り紊さぬやうに致せご傳へられたのである。其の次には
人には天地の神の分魂なる本心といふものあれば、其の本心に於て必ず惡を嫌ひ善を好むは道理なり。然るに腹

を立つる時は覺えず惡事に移り易きは心の鏡忽ちくもり
 て本心が善惡の分別力を失ふが故なり。
 斯うあります。腹が立てば心が騒ぎ氣が紊れて本心の鏡
 に是非善惡の正しき姿がうつらず道理を見分くることも出
 來なくなる。後で心が鎮まつて考ふれば、つまらぬ事をした
 不覺を取つた、残念な事である。舌を嚙むが如き思ひのある
 ことは、一旦の腹立より起る一般人の經驗する所で、精神修養
 上根本的に心得べき事である。
 又神誠正傳第九條に

人の不行狀を見て我身の不行狀になる事

本條の正傳は、人をしては行狀程重要なる者はなし。

行狀の如何によりて身を立るもあり、身を落すもあり。
 然るに我身の行狀は我身に最もよく知らるべくして却
 に知れ難き者なれば、日常他人の行狀を見て我身の行狀
 を改むるに注意するが肝要なり。
 扱誰人も皆神明の賜たる本心を有てれば、人の行を見
 て彼の所行は善きか惡しきか、我本心と相談をし、自らの
 判断にて是は惡しき所行と考へ付きたる時は、決して身
 に行はず。速に之れを避くべし。若し善き行爲なりと
 考へたる時は、直に進んで之を行ふべし。我本心には惡
 しき事と知りながら行ひ止まざる時は、所謂神明も嫌ひ
 給ふ所の罪と云ひ穢と云ふ事になるぞかし。
 教へ給へり。人の不行狀を見て之に誘はれることは並

人には有り勝の事で、果ては身を亡し家を潰すやうな事さへ
起きて来る。修養に志す者は善を見て之に倣ひ、惡を見て之
を警めるが又大切な心得であります。是れも生神教祖が精
神修養につき心の食物として與へて下されたる御傳言であ
ります。

昔羅馬の國では武士を養ひまする根本として不動の心を
得るに在り「いふ原則を立てて居ります。不動の心は先
に捧讀致しました神誠第七條の正傳に「心は常に大磐石の如
く押鎮めて云々」がある如く事に當り物に臨んで動ぜぬ事
であります。武士を養ふに武術が能く出来たばかりでは可
ない。心の根本が不動で、如何なる場合にもビクともせぬ平
靜の精神を養つておかねば、少し事があれば狼狽て出す。狼

狽てるご迷ひを生じ、事の正邪理否の分別がつかなくなる。
計畫は齟齬する物の順序が立たなくなる。惣てが失敗する。
それ故精神修養は色々な食物をこり入れてこの不動の精神
を作り上げる事が肝要である。昔近江聖人ご云はれた中江
藤樹先生の所へ或人が「ごうも私の心はフワ／＼して一向落
著が無いで困る。何うしたものでか。」ご問うて来た。それに
對して先生は先づ「沙汰の限りご存じ候。心裡面に常住不斷
の良知の主人公御座候」と答へられた。以ての外のことや。
人間ごいふものは表面に心が作用して居るが、其の裏を氣を
鎮めて御覽なされ。良知即ち本心ご云ふ主人公がござる。
そして其の次にかう申して居られる。「此の君に御對面をな
される工風に御方めになるご、いつごなく浮心が退きます。

扱その工風を斷間なく致し居られる程なく主人公に御對
面が出来ます。その御對面が叶つた後は何事に會ひまして
も氣が顛倒するやうな事はなくあります。云々」申された。
こゝに主人公に申されたのは本心のことでありまして、これ
を先に捧讀した神誠第九條の正傳中「人の行を見て彼の所行
は善きか惡しきか我本心と相談をし、自らの判斷にて是れは
惡しき所行と考へ付きたる時は決して身に行はず云々」教
へられた所と對照して見ますならば古今軌を一つにして
居ることが分りませう。近江聖人が主人公に言はれたのこ
我教祖の神が本心の玉と仰せられたのこそそれは一つである。
この物を見て誤らず事に臨んで動かざる本心を養ふにあ
らざれば何事も成就するものではありませぬ。一つの事業

を起しても成就するであらうか何うであらうかご心に不安
を懷き、少し事業が困難になつて來ると、此は逆もいけぬと氣
が挫け、學問をしても、糠袋の糠を絞りに出すやうに頭の血を絞
出さねば出來るものではないが、斯う苦痛では逆もやれない
からご心が挫けては到底その事業その學問が成就するもの
ではない。精神修養の無い人が初めから大きな望を立て、身
に餘つた事業を起して、中途半端なものになつて倒れて終ひ、
社會に迷惑をかけるやうな事は世間によくあることである。
小さければ小さく、大きければ大きく、それ相當精神修養を積
む覺悟を決めて焦心らず迷はず進まねば成就するものでは
ない。信仰に就ても、信心はして見たけれども靈驗を得るこ
とが出来ない。此の神様ではいけぬから他の神様に願つて

見よう。それでも思ふ通りにならぬ。又他の神様へ行くこと云ふやうに、彼方此方の力を借らうとする周章へ信心では遂に何等の得る所もなく終つて了ふ。頭に白髪を被る年になつても更に安心の力を得ることの出来ない信者も多くある。神様の力を借ること云ふことも、今日祈りて今日靈驗がなく、明日祈りて明日靈驗が現はれねば其の信心を止めること云ふやうな信心では、迎も神様の御心を動かしまつり、神の力を借りて大願を成就することは出来ぬ。信心は常平生から養うて置かねばならぬ。一の目的を立て、それを成就するにも、信心して靈驗を受けるにも、昔の諺にある「馬鹿の一つ覚え」が肝要である。此の馬鹿の一つ覚えに二つの意味がある。第一は馬鹿と云ふものは數々習ふことは出来ないから、一つ習う

たらそれを覺てそれだけをやる、外の事はようやらないこと云ふのご、第二は堅忍不拔、一の目的を立てたならば、それを成就するまでは、何んな良い事があつても、如何なる事を勧めて來ても、雨が降らうが風が吹かうが、困難があつても、障害があつても、一心不亂に其の事を成就せねば止まぬこと云ふのごである。昔の人の言うたことも聞かねばならぬ。精神修養はこの後の意味の「馬鹿の一つ覚え」でやるべきである。一度斯の道が眞の道であること信じ、斯の道によつて救はれようこと決心した時は、如何なる場合が來ても、何んなに苦しからうこと誰が何と云はうこと、一つ「御神誠御神訓に照して我情を去り我慾を捨て、正道を行ひ善行を踐み行くならば、その一つ」が養分となつて終に動かぬ信念力を作るに至るのである。

この信念力を作つてこそ神様を動かさ奉ることが出来るので、之が眞の信心であります。

ある時我教祖の神の所へ京家の武士といふ者が二人訪ねて来て無理難題を吹きかけた事があります。所が教祖の神が頓首それに應じなさいないので、武士は白刃を抜いて教祖に迫りました。教祖の神は自若として更に動じ給はず不埒千萬にも彼等は今にも斬らんばかりに敦圀きました。其所へ、今年歿くなられましたが、本部より二里西方の西六條院教會の高橋藤吉と云ふ柔道の先生と、矢張教祖の神の在した大谷で撃剣と柔術の先生をしてゐた今一人と、此の二人がヒヨイと参り合はせました。見るに二人の悪黨等が刀を抜いて教祖を脅して居る。教祖は自若としてござる。そこで高橋先

生が「お前等は何をして居る。人を斬ると云ふものは左様な手振りて斬れるものではない」と窘められまして、一言二言問答の末、其の刀を鞘に納めやうとした。が、どうした事か納らない。教祖の神は、此の時許してやつて下さいませと神様に。お詫を申上げられた。途端に鞘に刀が納つた。此の時教祖の神が自若として顔貌動ずる色も在さざりしは何故か。「彼等は無理を言うて来た。それには應ずる譯にゆかぬ。その爲に斬らうと云ふ。若し其の刀で斬られて吾身が死するならば、此方金光大神は此の世に於て神様の御用濟と心得て居つた」この仰せでありました。これ精神修養の極致、信心修行の極致と申すべきであります。所で、精神修養によつて事の成功をなさんと致しまするに、

吾々教師や教會長と普通の人はその意味が違ひます。吾々宗教家の成功と普通人の成功とは成功の目的が違つて居る。普通の人の成功を大別して見ますと先づ次の三つてあると思ひます。

一、貧しい者が家業に勉勵し、困苦艱難に打克つて富を得る事

一、下級の者が上級に進む事

例へば役人で三十圓位取つて居る者が、百圓取にも二百圓取にも進み、判任官が奏任官にも、勅任官にも親任官にも進むといふが如き事

一、事業を起しそれを成就する事

是れ等は普通の人の成功の目的である。所で吾々宗教家

の成功は何であるか。

一、多くの曲れる人を直くする事

一、多くの苦しめる人を救ふ事

一、人の祈念の成就する事

一、多くの病める人を助ける事

一、死生の安心を與ふる事

是れ等が吾々の成功の目的として居る所である。即ち吾々の目的として居るものは、多くの曲れる人、苦める人、病める人を救ひ、御祈念成就が出来ればそれを成功と云ふのである。信者の諸君は貧しい者が富み、下級が上級に進み、起した事業が成就する事、其の他にもありません。先づ是れ等の成功を望んで居られることと思ふ、此の信者の人の願ひ事を

成就するにも我等が思うて居る事を成就するにも其の源に至りますれば同じであります。皆共に修養の功に因ることでござります。普通世間ではこれを精神修養と申しますが、宗教に於てはこれを信心修行と申します。之を教祖に取れば御心行であります。即ち世間では人としての道を守り履むことによつて徳を養ひ、その徳によつて成功しようといふのであります。例へば勤勉儉約の徳を積んで富を作るといふ類であります。世の中には僥倖と申しまして、苦も世話もなく多くの金を儲け、又事業を成就して居る者を運がよい者として羨むものもあります。それは所謂こぼれ幸ひと云ひまして、之は多く永續きのせぬものであります。此の如きは精神界に於きましては尊い事と致しませぬ。宗教に於け

る信心修行は本より精神修養であります。が神様を前に立てて拜み、その神意の道即ち教祖のお示し下された御教を眞の道として神徳人徳を併せ養ふといふ所に普通世間の道以上の道があるのであります。教祖が神徳を受けよ人徳を得よと仰せられたのが即ちそれであつて、これが我が金光教の修養即ち修行の眼目であります。人或は神信心はよい運を願ふのであると思つてをる者があるかも知れぬが、それは誤解である。教祖は拜むだけを決して信心としてをられぬ。神の御心に叶ふ道を踐み行ひ、難儀苦勞艱難勞苦も神の思召である。心を動かさず、有難く喜び勇んで益々精進する心を導いて頂き、此の打任せた眞心に神の御取計を願つて、幸福へ幸福へ、安心へ安心へ救ひ上げて頂くのであります。努力な

く精進なき所には決して御蔭はないのである。即ち容易く
いへば神誠神訓を守り行ふことが修行であり成功の御蔭を
頂く母であるのであります。

そこでお互に信心に成功するには断えず神誠神訓を守ら
せて頂いて途中で休まないやうに、氣の緩まないやうに信心
の山へ登つて行かねばならぬ。吉野山を詠んだ歌がありま
す。是は吉野山の歌の中の名歌と云はれてをります。吉野
山の櫻は絶頂の花が一番美事であるそうでありますが瓢箪
に酒を入れ、供を連れて見物に行く。そして絶頂の櫻は見な
いで

吉野山霞の奥は知らねども

見ゆるかぎりは櫻なりけり

で歸つて来る者が多いさうです。絶頂の櫻を見届けて來
ようご出かけた者も、山道が遠いので途中で草臥れる。半ば
まで行くご、ああ腰が痛くなつた。毛布を敷き、瓢箪の口をぬ
け。マア一杯飲めご云つたやうな譯で、サアもちつご登つて
見やうご又歩き出すが、何所まで行つても花ばかりぢや、何處
まで行つても同じ事ぢや、絶頂までは容易な事ではない。「吉
野山霞の奥は知らねども」で歸つて來る。これは此の歌の一
種の解釋であるが、信心も同じここで山の途中まで行つて、見
ゆる限りは櫻なりけり、で、休んだり、後戻りしては、精神修養に
も修行にもならぬ。神の御山の奥の美事な櫻の木蔭に美し
く咲く花を眺める事は出來ません。
我生神教祖の御理解に「世の中に不淨と云ふことを言ふ。

教祖御修行の一端

不淨じやうとは淨じやうからず云いふことであらうが、此方こゝ（教祖けうそ）の不淨じやう云いふのは不成じやうで、事の成就じやうじゆせぬのを不成じやう云いふのちや、教祖けうそへられた。是れは教祖けうその神かみの御教おんけう九箇條くかうじやうの一則いちそくである。我教わがけう祖その神かみは物の成就じやうじゆを祈いのり守まもらせ給たまふ。物の成就じやうじゆは成功せいこうである。教けうを聽きかる、諸君しよきんは、一度いちど思付おもひて起たした事業じぎやうは成功せいこうするまで不撓たう不屈くつで進すすまれねばならぬ。一度いちど入りたる信心しんじんは成就じやうじゆするまで不動ふどう不拔ふたつで進すすまれねばならぬ。人の力ちからには限りあり。人事じんじは盡つしても尙なほ足たらざる所ところがある。精神しんじんの修しゆ養やうによりて成功せいこうを期きする上に、己おのれの力ちからに及およばざる所ところは、信心しんじんの修しゆ行ぎやうによつて神かみの御力おんちからを祈いのり、神かみに導みびかれ、教祖けうそに教けうへられ、一身いしんの成功せいこう一代いちだいの成就じやうじゆを遂たげられんことを祈いのります。今いま日晝ひる席せきは是これで終はりてあります。（拍手はくしゆ）

講題 教祖御修行の一端

(明治四十年七月五日夜
於金光教白金教會所)

何方にも引續いてよくお参りでありました。晝席に於て「精神修養は成功の母」と云ふ講題にて教祖の御神意を御取次致しました。が、今夕は「教祖御修行の一端」といふ講題でありまして、謹みて金光教祖の御修行の一端をお傳へする考へであります。が、先づ修行といふ意味について少しく説明して置きたい。

一體修行と云ふことは、一教の宗祖や教祖、又宗教家だけに限られて居るものではない。凡そ何事にも其の道に達せんごすれば、必ず修行といふものをせねばならぬ。例へば學問修行と云ひ、或は劍道柔道の修行と云ふが如く、何れの道にも

修行といふものは皆伴うて居る。そして其の道の奥義に達するまで其の道の修行を積むに非れば徳者とも達人ともなれない。一の繪畫を描いても文字を習うても其の通りであらぬ。人は達人ちや名筆ちやと云はれるまでに至るには容易ならぬ。修行がいたのである。猶茲に一言説明致したきは本日晝席に神語りたる精神修養と信心修行とは一致する所がある。其は神の教によりて心身を鍛錬し精神を向上するからである。普通の教に云へる精神修養は人ご人ごの間に於ける道徳的規律に基いて自己の向上を計るものであるから宗教的修養とは違ふ所があるのである。此の點を辨へ置いて御聞取を願ひたい。さて宗教家の修行に至つては即ち一面は神に通じ、一面は人の心中に立入つて、曲れる者を直くし濁れる

者を清くし、惱める者を救ふべき任に當らんとするのであるから、此の修行は修行中に於て最も六ヶ敷い。實地實行して顯幽感通の道に達せざれば、宗教者の本當の修行を終へたものとは言へない。そこで一教を立てさせられたる我が教祖の神の御修行に於きましても、必ず尊い所が無くてはならぬのである。此の天地の明教を神傳せられ、天地の大道を開かれたる我が教祖の神の御修行について、今此の不徳の範雄が口に語ることは實に恐入つた事であるなれど、其の一端を之れから御傳へ致さうと思ひます。さて、修行の事を大別して二方面とし、一を心行、二を表行と申します。我が教祖は何れを御修行なされたか、と云へば、表行を取らずして心行を修められたのであります。表行とは

如何なる修行を申しまするか云へば、あの人は水の行をして居る、火の行をして居る、また斷食の行をして居る、山籠りをして居ると云ふやうに、口以て語り得られ、眼以て見得られ、耳以て聞き得られる限りの修行を表行と申すのである。心行とは、他から眼に見んとして見えず、口に語らんとして語ることを得ず、耳に聞かんとして聞くことを得ざる、形無き所の心内での修行である。即ち一切心中に於て行法を修めて行くのを心行と申すのである。併し表行と雖も全く心行を意味せずして立つものではない。心行も亦全く表行を離れて行へるものではないが、我が教祖は修行の本義本體を表行に非ずして心行を修められたので、此は御神傳に「表行よりは心行をせよ」この御神意に隨はれたのである。其の教祖の御心内に

屬したる事を、今口に語り筆に現すことが甚だ困難であるが、之れを一言に神語りすれば、我が教祖は天地大祖神より御立教の神依ざしを奉ぜられてより、二十有五年の間、御開道の爲め精神御旅行をなされました。其の精神御旅行と申す事は、御肉體の御足を運ばせての御旅行ではないので、天地大祖神の神前に奉仕せられて門外に一步も出で給はずして、天地大祖神の御許に御精神が交通せられ、日夜參る來る氏子に神の御心を御知らせなされたので、此れを精神御旅行と申上げるのであります。

従つて我が教祖の神の御事蹟には、御舊蹟なご申して語る程の事が殆んどない云うても宜い位であります、我が教祖は專念神の御前の人となられまして、二十有五年の間、葦屋

の下六疊御一室の御結界内に於て御修行を成就致されまし
 たのである。茲に教祖の御修行を廿有五年間と稱するは安
 政六年十月二十一日森嚴なる御立教の神依しによりて御家
 業を廢せられて全く神の御前の人とならせられたる御年よ
 り申上ぐるので、教祖御信仰の基源は嘉永三年に發して御立
 教の動機は安政二年であるから、教祖三十有餘年の御修行と
 も御開道とも申上げるのであります。

此所で一言加へて置きたいのは、教祖二十有五年の間門外
 一步も出て給はず御心行御開道なされたと傳へられてある
 が、文久二年七月廿一日備中矢掛の智教院の山伏の伯父と云
 ふ者が、教祖の御許に來り此の方の配下にならねば人を拜む
 ことを差止めるに強迫し横暴の言動をなして歸りましたの

て、其の夜笠岡の信者齋藤又三郎氏の所に神の御差し向けに
 て御出になりしと、又神の御差圖ありて山神様を御召連にな
 り、深夜大谷横池奥の山に行き御修行を遊ばされた事があり
 ました。又神の御差圖により益坂の御親類に行かれました
 が、此れも神より御試しの御心行でありました。其れから淺
 尾藩主蒔田家に御年始に一度參上せられたことがあります。
 其の時に御召になりました御籠がありました。斯くて教祖
 は道を弘める爲め或は病者祈念の爲めなごにては家を出て
 行かぬと云ふ教風をお立てなされたのである。大方の教祖
 宗祖と呼ばれる方々は何れの宗教に於ても、其の修行のため
 に又其の教を弘むるために、山を踰え川を涉りて方々を遍歴
 遍路したものでありますから諸所到る處に靈蹟とか舊蹟と

か申すものがありますなれど、我が教祖の神は病者祈念のた
め、道を弘めるために門外一步も出て給はぬといふお立て方
でありますから、靈蹟舊蹟なごいふやうな事が出来る譯が
ないのであります。此の病者祈念のために道を弘めるため
に門外に出でぬと云ふ教風をお立てなされた事には深き理
由があります。第一は天地金乃神は天地に満ち渡らせ給ふ
が故に病者の所に祈念祈禱に行くの要はない。此方の道を
聞きて信心するならば、何れの所にも神は御在す故に靈験は
頂ける。行つて拜んでやるならば行きたる先は助かるであ
らうけれども、出た留守へ参つて来た者は、神の取次が居らね
ば、神が留守のやうな心がして、助かるべきものも助からぬ平
等に守るのが神の思召である。其の神の前立たる取次が一

歩も動かず、此所に居れば東西南北より何時参つて来て平
等に靈験を受けることが出来る。故に出ては行かぬとお立て
なされた。又此の道には禁厭をせぬ。禁厭は神の取次が病
者に接觸ねば出来ないからせぬのである。神は氏子の頼む
心に隔てさへなけねば遠き近き晝夜の別はないこの御神意
である。之れ我が教祖の神が病者祈念に出で行かぬと云ふ
道をお立てなされた所以であります。其の他にも理由あれ
ごも先づ此の二つを擧げて置きます。斯かる次第で我が教
祖の神の三十有餘年御修行遊ばされたる御靈地として、天地
の大道神傳の地として、天地の明教の立教の地として、今、備
中國淺口郡大谷なる木綿崎山の麓より外に、教祖の神の御靈
地御舊蹟と稱しまつる所は無いのである。

斯の如く我が教祖の神は木綿崎山の麓より外に出で給はず御修行遊されたのであります。苟且にも斯の道を教ふるために他を斥け斯の道を傳へるために他の道を誹り己れを善しとして他を蔑る様な事は道のお立て方として固く警められ、平和圓滿を旨と遊ばされた。それでありますから一言の御言葉にも過激な所はありません。如何に荒びくた心にも神誠神訓を奉讀すれば、自然に心が平和となり圓滿なる御言葉を傳へられたのである。之れ我が教祖の得られた御心行の結果でありまして、例へば一つの御神訓を拜讀しましても、

「討向ふ者には負けて時節に任せ」

ご仰せられてあります。心を荒立てて我に向ひ來る者あらば、負けて時節に任せよ。時の到來を待てよと教へられて、他の神を否定し、他宗の教義を誹謗して開くご云ふ立て方は全然教風が違ひます。故に、教へられて、
「我信ずる神ばかり尊て餘の神を侮る事なかれ」
ご、更に御神意を傳へられて、
「天地金乃神は宗旨嫌をせぬ、信心は心を狭う持つてはならぬ、心を廣う持つて居れ、世界を廣う考へて居れ、世界はわが心にあるぞ」
此を拜承して世界を一視同仁に守らせ給ふ御神慮の如何に廣大なるかを深く悟らねばならぬ。此れ平和圓滿なる御心行より立てられたる教風とは申し乍ら、吾々斯く廣き道の

信心をさして戴き居る事は無限の幸福とや申さん。信者方、教祖の神が斯くの如く圓滿を旨とし、表行に非ずして心行によつて立てられた斯の道の流れを汲み、此の神の教に従つて神徳を蒙らんとする人達は宜しく教祖の神の御心行に神習ひ奉る事が肝要であります。

さて、教祖の御心行が外に表はれて多少言葉に語り、筆にも書かれ得るここが出来ないではありませぬ。其の一二を擧げますれば、世の修行者には、或時は断食の行にて、日々三度の常食を断ちまして修行の一つとした者もありません。佛祖釋迦如來の如き穀物を食はずして永い間の修行をせられた例があり、我が國に於ても佛教を弘めた人にも、神の道を弘めた人にも随分断食修行をした者があります。我が教祖の神は

更に断食の行であるとして断食を爲された御事はない。けれども朝は鶏の聲を聞くと共に起きさせ給ひ、お手を済ませらるる直ぐ朝の御祈念をお勤め遊ばさる。其の未だ終らせられざる頃より早や多くの信者が廣前に參つて居ります。未だ夜も明けやらぬに御燈明の下に御祈念を始めさせられる。甲が歸らぬ中に早や乙が來り、乙歸らぬ中に丙が來るといふ有様で、かく多くの人が集うて來ますれば、未だ朝餉をこつて居らぬことも仰せられず。來る者を次へくご取次がれ、一々御帳面にお書きごめになつて神様に申上げられ、御裁傳を受けさせられて懇々と御理解を賜はる。かういふ次第で遂に日は暮れても未だ信者は歸らない。晩の御燈明を奉られて後までも御祈念遊ばされて御在した。普通の人

は早や床にも就いて寝る頃となつて、漸く朝餉、晝餉、夕餉の三
度を一度にお食事遊ばされる。寢に就かせられる頃ほひは
申す迄もなく夜更けである。斯くの如くして幾年を續けら
れたるか、今それを數ふることは出来ない。誰もこれを斷食
の御行をなされたご傳へた者はないけれども、斯の如く殆ん
ご斷食ご申してよい御有様で何年も何年も續かせられ、眞の
御安眠も僅に三時間内外に過ぎぬ御状態であつた。そこで
或時大神様から教祖に教があつて、以後は朝勤に出る時必ず
食事をして出でよご仰せられた。これは金光大神ご御神號
を賜はられた御時以來の事でありまして、その後は朝餉だけ
は爲されて御勤めなされた。けれども晝の御飯は飛んで夜
に至りました。斯の如く二十有五年御勤め遊ばされまして、

人が困難とする食事の行を自然に御修行なされましたが、皆
心行の中にあるが故に不食の行を爲されたごは申上げない
のである。毎日朝より晩まで人の絶え間なく參詣人がある
に、途中にて御小用に御立ちなされた事を誰もお見受けした
者もなし、範雄も前後八ヶ年間に一度も拜した事がない。
それから世の修行者は水行ご申しまして水垢離をさる者
があります。或は寒三十日間水を浴びるごか、瀧にうたれる
ごか、川に飛びこむごか、水を浴びて修行するのであります、
我が教祖の神は水行をなされたご云ふごは傳つてをらね
ごも、寒中單衣一枚を召されて參詣人の無き間、深夜に戸外の
椽板の上に端座して御心行なされたが、誰一人ごして教祖が
深夜寒行をなされてをるご思ふ者もなければ、此の御心行は

一時に水を浴びるより寒中深夜に及んで薄衣で居る方が體
には寒さを感じずる譯である。幾時にも水に這入つた如き修
行を幾年遊ばされたここか。今それを數へ奉るここが出来
ない。又夏の夜に蚊帳を吊らずに修行をするといふ事も能
く行はれることでもあります。我が本部のあたりは實に甚い
蚊の發生する地であります。多くの人参り止んだ夜更
けて後、一日の願事の中重き願の者あらば更に大神に争てか
助け給へ。御祈念を長々こなされるのが常であります。そ
の御祈念のまゝ、夜半に至り、其の儘其所に寝ませられて夜を
明かし給ひし御事も幾歳ありしか。吾れ今窺ひ知ること
出来ぬ。されど我が教祖の神は徹夜蚊帳を吊らずして夏
の御修行を遊ばされたが。其の時には蚊は螫さなんだと西

六金照明神より承り居るが、夏の夜の御修行は世には傳は
らないが、眼に見え耳に聞え人の言葉に語り出でられずして、
自然のまゝの心行を致されるのが其のお立て方であつた。
それ故に、範雄は前に云へる如く八箇年の間、教祖の神の御前に
何時参りましても、前々の御事は拜承して居れど、明治九年よ
り十六年御隠れになるまでの教祖の神の遊ばされたる御修
行の御事を語れよと求められましても、唯嚴然とお座り遊ば
されて、如何なる夏の暑さにも参拜口の外は、其れく、襖障子、
格子戸など閉られたる御内に座して扇も團扇も使はるゝで
なく、冬の何んな寒さにも火鉢に手を暖め給うたこともなく、
六疊の御結界の内に於て端座遊されてあつたと云ふ以外何
事も申上げるところは出来ませぬが、教祖は始めから天地の大

祖神から生神となされて大教を御神傳ありしかの如く思ひ
たらんには大間違である。教祖は幾年間幾度も天地の神よ
り御試鍊を御受けなされた。其の一例を挙げれば或夜更け
て御廣前の外庭に出て西東と駈けられ神の御差圖があつて、
子供の鬼ごっこをする様なことを續けさせられる。最う止
めよと御差圖がありてお止めになりた事がある。此れは眞
の一例であつて種々なる神の御試鍊は數ふる事が出来ない
程であつたと承つて居る。此れは神様より教祖が眞に心行
を貫くか否かと御試しになつたのである。愈々御試し濟み
て天地の神と同根とまで進み給うて生神と立たせられたの
である。吾々も厚き信者に御用ひ下さるに隨ひ神の御試し
を蒙り神秘の交渉のある様に信心の向上を願はねばならぬ。

斯くして教祖は顯幽感通の妙理に達せられ神人一致の道
を開かれたのであるが信者の修行の本義に就ては「壯健な時
家業を疎にし物毎に驕る事」と誠め給ひ、「此方の行は火や水
の行ではない家業の業」と懇諭せられてある。此は何れの
職務職業に従事する者も皆家業として勉勵するは斯の道の
修行であるぞこの御神意であります。世間には往々にして
日々家業をするのは唯食はんがために働くのであると思ふ
人もあらんが必ずや御道の信心をする人は食はんが爲に働
くのではない、働く爲に食ふのであると家業本位に大切にし
一家を立て子孫を教へて國家に盡すこと云ふ心を大にして家
業をせよと仰せられたのである。更に教へられて「信心して
壯健で家業をつこめよ君の爲なり國の爲なり」と此れ斯の道

の修行の最も大切なる所で、火や水の行に凝るよりは家業を
勵めば大した修行に受取りてやるこの御神意である。

斯くして教祖は不動の精神を養ひ一心の祈念によつて生
神と立たせられたのであります。修験者が白刃をかざして
教祖に迫りし時の御動作は本日晝席の「精神修養」について申
しました中に傳へ致しましたが又かういふ事がありました。
或夜御神前にて御祈念遊ばされてゐた時、御神前に吊し
てあつた御提灯に火がうつりてボーツと焼け落ちて、神
前に供へある所の御供物が燃出しました。奥様や御子達が
ソレ水よとお騒ぎかけなされたが、教祖の神は其の時手を著
けなした。ただ御一言遊ばされた。此の御一言だけで更に動き
給はぬ。やがて火は治まつたが、其の焼けた中に於て、大願を

籠めた或る者の御備物の包の上に記せる年書そのまゝに顯
然として灰の中から現れた。尊いかな、之が教祖の神の御心
行の御態度であつたと申して宜しからうと存じます。

教祖の神の此の時代は、今のやうな世ではありませぬ。修
験者家相見の輩は實にひごく妨害を加へて來た時代であり
ます。或時一人の老婆が參つて、之をお供へ下さいませと重
箱に牡丹餅を入れたのを持て來ました。教祖はそれを供へ
られた。所が其の夕の御祈念の時、神傳があつて「此の牡丹餅
は亭主(教祖)一口食べ家の者には喰はずな」と云ふお知らせで
ありました。如何なる事かと思召されて、お知らせの通り其
の牡丹餅を取つて唯一口食されたが、暫くすると教祖は胸に
苦痛を覺へ、バツと吐血遊ばされた。「ああ恐入りました。此

の牡丹餅は此方を毒殺せんとして持つて来たものでありま
したか。有難う存じます。直様神前の御神酒を戴かれた。
一時の吐血だけで御身は恙なく在した。教祖は神様に御禮
を申上げらるるに、浅墓にも浅間しい心で居ります。
何うか此の者を咎め給はず宥してやつて下さいませ。此方が
不徳でありますから彼等が未だ御神徳を知らぬのでありま
す。其の牡丹餅に毒を盛つて来た者の罪のお詫を夜を明し
て願はせられた事がある。後で之は山伏修験者の仕業であ
つたことが分りました。前にも一言申しましたが、教祖御道
始めの時代は家相見と修験者と申す者が非常に跋扈して居
りまして、幣つけ祈禱をなし、憑依ものあり家相方角の崇りあ
りなご、様々に迷信祈禱が盛んに行はれて居たのでありま

す。教祖は斯る迷信を道破し人生の救済を本願として天地
の大道を開き給ひ、崇り物も障り物も家相方位も生神金光大
神の手續を以て天地金乃神頼むといへば、家相方位は自由
させる、崇り障物は取拂うてやる、教へられて其の通りを守
る者は皆助けられるので、家相見や、修験者が敵対し遂に斯か
る悪事を試みたのであるが、斯かる悪事は決して天理は許さ
れぬが、然れど教祖は徹頭徹尾平和圓滿なる御心行を貫かせ
られたのである。唯々恐入るより外はないではありませぬ
か。
又或時山伏が三人来て教祖に對ひ難題を吹きかけ、惡口雜
言の末、理不盡にも神前の御供物を始め種々な物から、廣前に
引廻らしてある御幕に至るまで残らず奪ひ去つたことがあ

一七二
ります。其れを教祖は御座のま、御覽じて更に動き給はず、
なぜ取るかとも仰せられなんだ。此の時は如何なる御神意
であつたか、神の御前の洗ひ替である。彼等悪黨は供物を奪
ひて満足す。信者は御靈驗を受けて悦ぶこの誠に平かなる
御心で在したのである。山伏等が歸つた後に尾道の信者高
橋喜平云ふ者が参拜し、神前が寂しくなつて居る状を拜し、
教祖の御神意を伺ひて歸り、新に御幕を作りて奉りましたの
で五日と経たぬ内に廣前の裝飾は以前よりも賑はしくなつ
た。従來圓に金の字の御神紋でありましたが、此の時から今
の半八行の御神紋となりました。之等を以ても教祖の御心
行の程が窺ひ奉られます。教祖の御開道に妨害や敵對がま
しき事をした者は山伏や家相見の輩の迷信行爲を業とする

者の外にはありませなんだ。
教祖は大海に逆捲く浪も之を鎮め治めたいと爲さるる平
和圓滿を旨とせられた御心行で、人の眼にて見んとして見る
能はず、口にて語らんとして語る能はざる所にその御修行が
あつたのであります。そしてその御修行は六疊御一間に於
てなされたのである。六疊御一間と申しても唯六疊御一間
の家ではない。今年二十五年記念といたしまして、教祖の神
が御修行遊ばされた其の御家の姿、又平面圖等をも参拜の信
者にお頒ちなさるべく、只今其の御準備中であります。六疊
御一間と佐藤巡教師が申されたのは之れであるかといふこ
とが、来る十月には諸君にも拜まれます。教祖の御心行は山
を踰え川を涉りて難行苦行する行よりも最難しい御修行

一七四
である。教祖の神はよく吾々に御理解遊ばされた。歌人は座ながらにして名所を知る。躰は居ながら糞をする云ふここがある。斯う教祖がお咄しなさるご、ハイ有難う存じます。云つて居つた人も多くありました。が教祖の其の御心を悟つて歸る者は滅多になかつた。其のお言葉の意味が分らぬので、或時之を御理解なされた歌詠みは行つて見ぬ所の名所をも見て来たやうに歌に詠み出で、無き櫻の花も有るが如くに歌に詠む。躰はソレは反對に足が立たぬ故に便所に行つて居る。此方此の内、端然として外へは出ぬ、歌人に非ざるが故に見て来ぬ名所の歌は詠まぬが、何時見ても動かずして居るので躰と思ふ人もあらうが躰に非ざるが故に居ながら使用

一七五
はせぬ。此所に斯うして居て天地の大祖神の教を受けて、地の道理を傳へ聞かせて居るのである。この御神意である。斯の道は、此の六疊御一間に於ける教祖の御心行がそのまゝ、教となつて現はれたのであります。明治四年春の或時、教祖の神を陥れ奉らんごする悪人がありまして、教祖が出社中組合うて強盗を働いたご、時の淺尾役所に密告を致した者がある。今朝參つて見れば、昨夜強盗を働いて顔に墨を塗つたまゝ、未だ洗はずに居る所を見たご、密告したのであります。我が教祖の在した大谷村は、備中國淺尾藩、蒔田家の領分でありました。が夜も晝も探偵が入込みまして、果して強盗を働いたか、働かないのかと探索いたしました。これが教祖の神の御耳に入つた。『ああ恐入つた事だ。吾

不徳なるが故に何者か左様なことを申入れたのであらうが、強盗を働いたと密告致した者は心が心であるまい。ごうか宥しておやり下されませ」と御祈念を遊ばした。所が事判明して、何うして大谷の金光は、強盗ごころか、人を助け人を救ひ、生神ささへ稱へられて居るごいふ事が分りました。何のために斯る密告をしたかといへば皆迷信祈禱者の嫉妬よりしたものである。それを教祖は哀れな者であるご罪のお宥しを御祈念遊ばされたのであります。其の本人はお上の役人より甚くお咎を蒙つた事がありました。又此れは小さい事の様であるが、近藤藤守氏が信者ご共に参拜して居る時、大きな百足が一疋、室の隅より匍ひ出て、教祖の御膝の方に入りつゝあるを見て驚き、怖々に金光様御膝の下へ百足が匍ひ入ら

んごして居ります」と申上げるご、「捨て、置けば自然に匍うて逃げる」と宣ひて更に動じ給はず御理解を續け給ふ内に百足はゾロリ／＼と匍うて去りたが、其の御態度を拜して皆恐入りた事がある。此の一事を以ても教祖御神前に端座なされてありし御模様を直々拜する心地がするであらう。之れ等皆教祖にあらせられては御心行である。

斯かる事も教祖山を越へ川を渡りて御修行遊ばされ道を弘められたる事ならんには、其所此所ご御靈蹟御舊蹟なご、稱せらるゝ聖場も後世に遺る譯であらうが、六疊御一間を門外に出でまさずして御心行を御成就なされ、天地の明教を御傳になつたのであるが、故に、教祖生神の御靈地御神蹟は大教會所の外にあるごごなし。嗚呼尊き木綿崎山の神蔭である。

茲に一言注意を要する事あり、其れは本教の教師が、教祖の
 教風は難行苦行がないので容易い様に思ひて、口に心行、心行
 と謂ひつゝ、精神の鍛錬を怠る者があつたら、教祖の御神意を
 忘れた者である。それから今一つ氣を著けねばならぬ事は、
 本教は教祖の道の御立て方に弊習がなく社會から非難攻撃
 がないので、教師も信者も安心し過ぎて、結構ちやく、日を
 過す嫌ひがあるから、此れはお互に氣を著けねばならぬ。安
 心と油斷とを取違へぬ様に致したいのである。
 斯くて教祖は夜ごなく晝ごなく詣で來る人を助け給ひ、世
 を救ひ給ひて、明治十六年九月二十八日まで御道傳へ御教導
 を給はり、二十九日より御廣前を退かせられて、終に十月御十
 日旭日のさし昇らんごする頃ほひ最早此方世にあらずごも

斯の道は失はれざるべし、この最後の御神言を遺し給ひて顯
 尊身を神隠し遊ばされた。今年はその二十五年を迎へたこ
 ごとであります。

此の御十日ご申しますることに就て一言申述べます。九
 月の十日は生神教祖の「永世の祭日」であるご天地の大祖神よ
 り神宣をうけ給ひし御日柄であります、御存世中、九月十日
 さいふ日は一年中の御祭日ごして厚く御身自らも祭らせ給
 ひ、又信者も祭つた日であります。従つて毎月の御十日は靈
 験日ご稱へられてゐました。御在世中は九月の御十日であ
 つたが、これは舊曆九月十日で、それが明治十六年には新十月
 十日ご舊九月十日ご同日であつた。此は生神教祖の永世
 の御祭日ごして、まだ曆の御改正もなき昔から御神定になつ

て居りました御日柄であるが、此の新舊同日の御事は明治九年の秋のことで、備前國松崎新田の信者伍賀慶春と云ふ者が教祖の御許に参詣の時、今は曆が二通りあるが、後に十日と云ふ日、新舊合うて行く時がある。其の時、此方は神上りするのぞと宣ひしことがありましたが、慶春が何時の事やら何の事やらと思つて居つた處が、新舊同日の御十日に教祖の御隠れとなりたので、今更の如く恐入つたのである。斯くて御在世中から引續き永世の御祭日となつたことは、此の一事だけを以ても教祖が生神で在したる事を證し奉ることが出来ると思ひます。以後は新曆によつて十月御十日がその御祭日となつてをるのであります。以上教祖御修行の一端を神語り致しましたが、前來述ぶる通り、何分御心行のことで不徳

の範雄が此れ以上申上げんは却て恐入ることであります。終りに猶一言重ねて申します。かく教祖の御舊蹟として、は、立教の地として、大道神傳の地として、三十有餘年の間、御心行を遊ばされた御靈地として、唯備中國淺口郡大谷の里木綿崎山の麓、即ち我が本部の地があるのみでありまして、此の一所たる木綿崎山に於きて、来る十月九日は、申告祭、教祖神上りまして、以來今日に至るの二十五ヶ年の間、吾々不徳の者等が教祖の神の御名を奉じて、その御傳へ事を四方に傳へ、斯くも世に多くの信者が出来て来た状況を申上げ、十日は二十五年大祭を仕へ奉らんとして、今専ら準備中であり、諸君も御神縁を蒙られて、いつも乍らの御靈地なれど、殊更に此の二十五年大祭の木綿崎山の御威徳は盛大ならんと窺ひ奉りま

すれば何卒諸共に神集ひに集ひ、教祖の御心行の御靈地に集
ひて御神恩の御禮を申上ぐるは、當に信者たる者の本分であ
るご心得べきであります。

「表行よりは心行をせよ」
これで今晚は終りであります。(拍手)

幸福とは何ぞや

講題 幸福とは何ぞや

(明治四十年七月六日書
於金光教日本橋教會所)

諸君にも……………

去る一日東京教會所を始めとして深川、芝、白金と昨夜まで
開教致し、本日當教會所に移りました。本職の此の度の教導
は全く今日晝夜を以て終ります。之を合せて都合十座の教
導であります。之を教祖廿五年記念説教十題と致しまして、
速記録を他日一冊の物として廣く頒つ考へて居りますから、
左様御承知を願ひます。それで當教會所へお断りしたいの
は、此の晝席は「人智は有限」といふ講題にて教導する筈になつ
て居りました。が、如何なる譯でありますか、開教第三席に當
る深川教會所に於て、講座に登つた後までも氣が付きませず、

揭示が間違つたのであらうと申しましても間違つたのでない云ふので已むを得ず當教會所に豫定してゐた人智は有限といふ題を深川教會所で講じました。所で深川教會所に於て講すべき幸福とは何ぞやといふ講題が當教會所の晝席になつた次第であります。夜席は終結して豫定の通り「死生の安心」といふ題であります。講題の入り替つたことを先づお断り致して置きます。

さて「幸福」とは文字の通り「さいはひ」といふ事で、吉い事嬉しい事であり、吉い事嬉しい事であるか云ふ事を説明いたすのが今日の講題の本意である。幸福とは之を一言に謂ひますれば、精神も身體も共に不安なくして人生を送ることであります。更にいへば人生には多

くの苦痛が附纏ふものであるが、其の苦痛を追ひ退けて、苦を變じて樂となし、心直くして曲らず、氣豊にして濁らず、人に交りても、神の御前に向ひても耻づる所なく、死生の安心を得たるを、人生の眞の幸福と云ふのであります。此の幸福を得れば自ら快樂となるのでありますから、學問上の議論はさておきて、茲には幸福と快樂とを同じ意味の中に納めて述べます。幸福だの快樂だのといふ事を學問上から説明しますれば却々議論の喧ましいものであるが、吾々は一日食はねば飢を感じ、時に悲しき事あれば眼から涙がこぼれる。斯ういふ肉情を有して居ります。哲學だの科學だの、理窟や議論を以て幸福や快樂を求め、容易の業でない。そこで學問や理窟よりも、我が生神教祖の御教に依りまして、此の人生を

幸福に此の世を快樂に暮らして行くやうに致さうと思ひまして、此に斯ういふ講題を設けてお取次することに致しました。

人生の幸福に二つの方面があります。一は肉體上の幸福、一は精神上の幸福であります。肉體上の幸福といふ事を極めて卑近の例によりて説いて見ますれば、暑さ寒さを防ぐ衣服に不自由なく、雨露を凌ぐ家の住居に不自由なく、腹の空いた時に飲食に不足を告げず、其の上には身體無病息災ならば、先づ身體の上には於ては満足で、幸福と申さねばならぬ。精神上の幸福といふ事になるさうは行かない。暑さ寒さを防ぐ衣服に不自由なく、雨露を凌ぐ住家に不自由なく、日々の飲食に不自由は告げねども、身體は健康にして無病なれども、其の精

神は火中にあるが如く、苦しく、監獄に居るが如く、悩ましく、外身體安全にして内心の煩ひに堪へず、不愉快極まる苦痛を忍んで居る者がある。又身には襪褌を纏ひ、口には粗食を喰つて居りましても、靈光に照らされて心の中に魂の光り輝き、寒さ暑さは凌ぎ兼ねても心は春の如く暖かに、雨露を凌ぎかぬる破屋に住んで居ても心肝に氣廣やかな者がある。黒塗の車に乗り或は二頭馬車に乗つて居りまして、足の痛むやうな苦しみを持つ人もあり、身に汗は流して居ても心の涼やかな人もある。肉體上の幸福と精神上の幸福と相一致する時もあるなれど、兩方が相一致するといふことは人間では仲々得難いのが常である。今範雄が經驗した事を一つお話して見やうと思ひます。是れは明治の十四年十五年の頃、未だ教祖

の神世に御在して日夜神の御教をお傳へ遊ばされてゐた時
の事である。範雄の郷里今の藝備教會は大谷から六里餘り
西北にあたります。その田舎山道を通うて教祖の御許に參
るのでありますが大谷を距る三里ほご西北に新賀の長迫と
申す谷間があります。谷間の山坂で僅に道幅三四尺位の道
で歸路は一方左は池があり一方右は谷川で其の道を夜通る
ので一步踏み過ては池か谷川かに落ちるのであるが教祖生
神のお話を時の移るのも忘れて承はりお日没近くなつた時
分教祖の神の御前を辭しまして歸路につき長迫を通り掛り
ます時は眞暗闇に提灯は持たず人家も遠く雨は降る長い細
道である。その道を手と足とで這うたのであります。池に
落ちてはならぬ。谷川に落ちてはならぬ。其の池と谷川と

の間の道を這ひぬけると狭い急なる坂の野道で左は谷合ひ、
右は畑の間の小路で、其の小路を兩手を前足の役にして四足
を立て、這ふのであるが手に土がつけばアナタのお土が手
につきます。有難い事ぢや、暗夜の危険な山路でも手足が立
てばこそ斯うして這うても歩かれる。うれしい事ぢや、家
へ歸れば信者が待つて居る。金光様の御威徳を授けてやれ
ば信者が助かるこの悦びに満ちて斯うして四つを立てて這
うては居るが犬でも猫でもない、此れが信心の道ぢやと勇ん
で山の中を這ひ、急ぐ心持は雨が降つて身體が濡れば、
なに着物物を脱げば何でもない、斯ういふ覺悟だ。狐狸が出や
うが、山犬が出やうが、そんな心配は一切ない。教祖生神様と
一緒に歩いて居る。天地の神様と共に歩いて居る。斯うい

ふ心持でありますから、汽車の一等室に居るよりも、其の心は安い。後先の人に案内せられ、電氣の光に照されて通るよりも、其の心は明るい。今日も、教祖生神様が尊い教を又一つ下された。その有難いみかけを背に負うて歸つてをるのであるから、夜が更けようが、雨が降らうが、路が悪からうが、そんな事は、何とも思はない。斯くして家に歸れば、今日は先生が大谷の生神様の御許にお参りなされた。今にお歸りであらうと、信者は夜がおそくなつても待つて居る。さあお歸りになつたと迎へる。先づ風呂に言はれても風呂どころではない。草鞋を脱いで足だけ拭いて上る。何の疲勞も覺えぬ。直様教祖の神より承りし事をお取次する。信者はみかけを受けたと言つて悦ぶ。その樂みといふものは、今頃黒塗の車

や馬車や一等汽車で往來する有難き嬉しさは餘程違ひます。皆さん信心をして神と接し、神と一つになつて行く時の樂みは又別なものであります。足の裏には胼胝が出て、手は歩くべきものではないが、獸類同様に手で歩き、着物を濡らし、普通ならば随分と辛い苦しい事であるが、心の中には何の煩ひもないばかりか、靈光に照らされて、眞に吾れ眞の道を得た。籠めて信心する時は、吾が心の中にズツとこの光を受けて行かれ、無上の幸福を感ずるものである。眞實の幸福、眞實の快樂は眞の道を得たり、この自覺に伴ふもので、吾は神と共に暮し、吾は道と共に住む、斯ういふことになり、實に人間の幸福は無上であつて、果なく極みない樂みを得ることが出来る。

人生は誰も幸福を祈り快樂を求めまして不幸を嫌ひ苦痛を厭ひます。然るに幸福と不幸と快樂と苦痛とは物の表裏の如く物の兩端の如く相並んで行くのが人間の世の中である。諺にも「樂は苦の種、苦は樂の種」と申します。誠によく言うてをります。苦をすれば樂が出来るし樂をすれば苦が来る。苦の次には樂が並び樂の次には苦が並ぶのが世間の常態でありますが、肉體上の苦痛が其の儘精神にまで及んで心をも痛め苦める事になつては、それは吾身で吾心を殺す事となり、遂に生命をも失ふやうになる。例へば病氣した場合に、其の病のために此の肉體が苦痛であると共に心そのものが苦痛を感じ、肉體の病のために心まで煩ふなら、それは身の置き

き所も心の置き所もない事となり、病は益々重くなるばかりで、吾身で吾心を殺し、吾生命をも亡ぼすに至るであらう。折角信心の道に入りて信心をして居る者が、其の肉體の苦痛を其の儘に心の上にとぼし來つて、吾心を苦め殺すに至るといふ事は、信心甲斐のない事である。如何に肉體に於て苦痛があつても、其の精神に迄は及ぼさぬといふ悟りを得るのが、信心の眞の道を得たといふものである。如何に身體は苦しくとも心は安らかであるといふやうに、心と肉體とを引分ける。この出来る修行をしなければならぬ。そこで我教祖の神様は人間の此の肉體といふものは、食はねば飢を訴へ、着ねば暑さ寒さを覚えるものであるが、此の肉體を安んぜんが爲には、先づ其の心を安んぜねばならぬとて

「心配する心で信心をせよ」

ご御親切に教へられたのである。心配とは不安心の意味である。事に當り物に當りて思ひ煩ふ意味である。其の思ひ煩うて苦勞する心を物事から離れて神様の方へ向け、信心に専念して神の靈驗に助けて頂けこの御教であります。

我教祖の神様の本願云ひますものは、貴賤上下賢愚の別なく、我神の御名を唱ふる者には平等に其の心の中に幸と樂みとを與へてやりたいこの御思召であります。多くの寶を貯へ金殿玉樓に住めば、其の住む程の心に幸福と快樂とを與へてやりたい。身は假令襤褸を着、淺間しい姿をして立働いてゐても、其の心の中に光明輝きて、神の愛、神の恵を歡び嬉しむ、安心の幸を與へてやりたいと云ふのが、我教祖の御神意で

ある。御了解出来ましたか。さてそこに到るには第一に足る事を知り、分に安んずる事を皆考へてをらねばならぬ。足る事を知ることは、その場所その時に於てそれだけの身分に安んずる事である。己は年俸千圓を得べき技倆がある。それが此所に勤めて居るために八百圓しか貰へぬのは不愉快ぢや。働く氣になれぬ。止めにしやうなごご不足に思ふやうなのは分に安んじたものごは言へぬ。それはその時の事情に従ふべきもので、千圓の年俸を貰ふべき者が八百圓で生活することは苦しい。なれども八百圓の時は八百圓の程度に於て、九百圓の時は九百圓の程度に於て、身のあたりの始末を付けて、自分の仕事は仕事として致々汲々ご働き勤めるのが、即ち分に安んじ、足る事を知るごいふ事である。それが自分

を段々高める所以である。分を知らないご不足が起る。不足が起きては働きそのものが不愉快になる。気が動く。不安である。さういふ者には千圓される身分の者でも千圓貫へる時がやつて来ぬ。不平や不足に代へて、吾は命ぜられた任務を盡す事には人後に落ちぬご云ふ努力心が出世發達の土臺である。此の心が幸福を産む母である。

さて人生ご云ふものは奇態なもので、人生觀に就ては、去る一日既に東京教會に於て講じたから、此の中に御聴きになつた人もありませうが、人生の事は考へ方によりまして、此の世は苦痛ご思へばまるで不愉快であり、又楽しいご思ひますればまるで楽しい。併しながら愉快であるご申しましても、人生を遊び浮かれて暮すごいふ事は天理が許さぬ。苦痛の世

だご申ししても、日々泣き暮して行かれるものでもない。人は人たる本分を盡すが人間の本來である。人生の目的である。所が此の人たる本分を行ひ遂げようご致しまするに就ては、之を妨げるものがある。この障害が苦痛の原因をなすのであります。之を退けて人間たる本分を勤めて行かう、人間の道を墮落せずにご参らうご思ひますれば、その苦痛を苦痛ごせぬ、工風が肝要であつて、そこは偏に心の持ち様で、曩にも申し通り、身體が病氣に罹りまするごも、肉體の苦み其の儘に精神も共に悩み煩ふごこのないやうに、何事の障害苦痛をも心の中に一の樂みを以て斥けて行き、人間本來の道を盡す所に人たる面目があるごこの自覺が得られるならば、自ら幸福が得られ愉快が感ぜられるので、この決心をつけるごことが肝要で

ある。人生の大目的は人格を高めて神格に上すことにある。即ち人の資格を高めて神様と我が一つになることにある。ますが、ここに至る道が人の眞の道で、その道を盡すのが人間本来の面目であります。それ故此の眞の道に叶うた生活を致しますならば、その時初めて人生眞實の幸福が感じられるのであります。されば此の尊き幸福を得るがために之れが障害をなす悪魔と戦ひ争ふのは苦痛ではなく、眞に愉快な人生の仕事である。所で此の幸福を妨げんとする悪魔とはごんなものであるかと申しますと、聞くも見るも喰べるも飲むも、足る事を知らず、その分に安んぜず、度が過ぐれば皆悉く悪魔となるのである。それは人格を害ふからであります。人格を墮落させる悪魔の道は即ち邪道であります。例へば神

佛を拜むのは善い事であるが、所謂淫祠邪教と名くべき、教理も無ければ眞理もない、假に神と名があり、假に佛と名があるがための神佛を禮拜し、又甲を拜んで乙に移り、乙を拜んで丙に移り、丁に移るといふやうな、取止のない信仰をして行くならば、之は所謂迷信妄信で、己の人格を傷ける所の悪魔を信じ、邪道を行つて居るのである。尙ほ露骨に申しますれば、芝居を観ることは悪いことではないからと申しましても、毎日毎夜劇場に行つて、役者の顔ばかり眺めて居りましたならば、それがごうなりますか。乃公は酒を好むと申しましても、毎日毎夜酒に酔つて醒むることなかりせば、ごうでありますか。即ち一切見るも聞くも行ふも、よしそれはその時愉快であり、樂みであつても、度を過ぐれば我等人格を害ひ、墮落に導き幸

福を奪ひ去つて了ひます。すべて何に限らず、其の度ご其の道ご其の所を得ざる時には、直ちに人の人たる本分を墮落せしむる悪魔となるものであるといふ事を覺悟すべきである。眞實に正しい道を得る事ほご人間の幸福はない。愉快はありません。お互は信心によつて斯の眞の道を得ようご日夜につごめて居るのでありますが、前にも申した通り人間の資格を段々神の力に依て引上げて頂き、神様ご一つになつて共に暮らし、共に立働いてをるごの自覺が得られるならば、これほご幸福な事はありません。斯うなつて來れば、世に在りては國のため、家のため、世の人のために立働くごが愉快此の上もないやうになります。此の人間の格式を落さぬやうに心がけて貰ひたい。

人間ごいふものは前途に希望を持つごごが大切でありまして、上へ上へご向つて進んで行かねばならぬ。それは一身の出世も一家の繁昌も皆この希望から生れて來るのであるが、兎角人間は自分で自分の前途に危惧を抱き、發展進歩にケチをつけたがる弱點を持つものが多い。そこで教祖の神は「悪いごごをいうて待なよ先を樂しめ」ご御諭しになられました。禍は招くに依つて來るものであるります。誰もすき好んで禍を招く者はありません。己が心に不安を抱き、取越し苦勞をし、前途にケチをつけるごごは、禍を招いてをるも同様で、それ等が災の種ごなつて、如何にも願ふ通りに禍が來る。一つの學問をして、斯うやつて居るが、此の學問が仕遂げられて世間が使うてくれるであら

うかご引込思案をしてをるやうでは、逆も學問は成就せず、人が使うてくれるやうな人物にはなれない。斯ういふやうに働いて段々金を溜めて行つてをるが損をするやうな事が起きはすまいか、人が来て奪うて行きはすまいかなど、取越し苦勞をしてゐたら、思ふ存分の働きは出來ず、碌な事は起きては來ぬ。こんな人に繁昌はない。子供を育てるにしても、此の子供が大きくなつて、世間に迷惑をかけ親を苦めるやうな者になりはすまいかなと思つて育てたら、一日も安き心なく、又良い子に育ち上るものではない。容易ならぬ苦痛なれどもその苦節は厭はぬ。生立つ先が樂みぢや。立派なものになつてくれよと、將來に希望をかけて育ててこそ、苦痛の中に育つて行き、立派な人にも生長する。日夜の勞働は隨

分えらい。けれども斯うやつて貯へられる金はこれから先吾が家の繁榮を築き出す基である。先を樂んで働けば、日夜の苦痛も愉快となり、眞實幸福を招くこととなる。頭の鉢が割れる程鍊り上げて、この學問を世の役に立てよう。それが俺の天職ぢやと思へば、學問することが嬉しくて研究せずには居られなくなる。さればこの希望に生き、人間の本來の目的を達せしめんために、
「悪いことをいうて待たよ先を樂しめ」
こは教へられましたのである。將來に希望をかけて働けば苦痛は苦痛ぢならず、却て困難に打克つ苦勞が愉快となり、幸福の門を開く鍵となり、悪いことをいうて待てば禍を招く先を樂んで働けば幸が來る、此の幸福と人生の快樂とを

得せしめんとして、簡単な御言葉の中に人生の奥義を教祖の神様は御親切に教へ下されたのであります。昔の諺に「苦は癩の種、癩は病の種」と云ふのがあります。重い物を擔いで居る苦痛は、それを卸せば止む。身に寒しと思へば厚着をすれば暖くなる。暑しと思へば風を送れば涼しくなるが、此にいふ癩の種となる苦は心の苦痛を云うたのであります。心が苦痛を感じると其の心が癩を起す。癩は差込の病、激しく來ると氣絶させる。それ故苦は身を亡す毒である、苦をすべからずこの諺である。そこで信心する人は、ごんなに身に餘る苦痛が來ましても、その信心の力によつて神様の力を借り、苦痛に打克つて幸の歡びを得るやうに御靈驗を蒙りたいものであります。

さて人は萬物の靈長なりと稱して居ります。人が萬物の靈長だといふことは、他の動物が言うて呉れたものではない。人間自らが、一切の物に對して己が一番優つて居ると言はば自慢した言葉である。然らば誇るだけの眞價がなくてはならぬ。其の眞價は何か。人は他の動物に見ることの出來ぬ靈妙不思議の作用を有つて居る。即ち神人一致といふ作用はその最高のものであつて、是れ實に最大な幸福の境地である。此の境地に至り得るものであるから、我等は萬の物の頭である。萬物の靈長と自稱し得るのである。然るに靈長といひつつも、動物よりも劣つた淺間しいものが多くあります。皆その心柄から落ちたものであります。其は人間には性能に神的性能と、傾向に獸的傾向がある。

人は人格を高めて神格に上るほどの尊き性能があるなれど、
 一步間違へば禽獸にも等しき者と落ちぶれる傾向があるか
 ら、正しき眞の信心の力によりて自分自らを救はねばならぬ。
 實に其の行や其の志や下等動物に等しきまでに落ちてを
 るものもあります。其の中にも習慣となつて居つて皆左程
 に思はぬ事であるが驚くべき事がある。此の邊ではごうで
 あります。上方へ參ること多くある。中國にも多くある。
 その一二の例を申しますと、岡山縣の某神社に詣つる者は御
 祭神を拜むより、狼の姿を描いたものを拜んでをる。狼の居
 るご云ふ穴の前に行つて人間が平伏して居る。又稻荷の御
 祭神は宇賀魂神であるが、その神を拜まずして、狐の居る穴に
 供物をして、狐の力を借りたいと平伏して拜んで居る所が方

々にある。諸君、これをしも人間の墮落したものなりと言は
 ずして何ぞ申されませうか。萬物の靈長、生きとし生ける物
 の靈長であるご人間自から言うて居りながら、狐や狸や狼の
 前へ頭を低げて頼みますれば、人間より其の方が偉いのでは
 ないか。而もその願うてをる事は、福を下さいませ、幸を與へ
 て下さいませと拜んでをるのであらうが、若し幸福を得、快樂
 を得た所で、それは狐と共に歡び、狸と共に樂み得るほどのも
 のであらう。あなた方は幸にも我が教祖の眞の教に導かれ
 眞の道に引出されて、光明の大道を歩いてをらるゝが故に、ま
 さか狐や狸の穴の口へ行つて拜む氣持は起りますまい。こ
 れ教祖の御教の光である。あなた方は此の結構な道へ引上
 げられて、神様の格式へまで上らして貰はうとして居られる。

然うでありませう。誠に此の上もない幸福ではありませんか。去る二日深川教會に於て「神人一致」といふ事を講じ置きました。其の席の話を聴かれた人は、神人一致と云へることを、今述べて居る所と照し合せて考へて御覽なされたならば、よく分らうと思ひます。萬物の靈長と自ら言ひながら、狐狸より以下に降つて居る人が此の人間界にある。それが吾々の友達、吾々の同類の仲間であると思へば、吾々は金光大神の御教の綱を以て、其の畜生道に落ちてをる者を引上げてやりたい心は致しませぬか。能く考へて御覽なさい。金光様有難う存じます。有難う存じます。朝晩の御拜をして居られるだけでは、左程にも思はれませぬけれども、斯く彼れ此れと物の理非を明かにして見れば、お互は如何にも有難い道へ引

入れて頂いたものであると銘々の幸福を返すくも御禮申さずにはをられないではありませぬか。人格を高めて神格に上し、自己と神様と一致する之れが人間の大理想、大本願であります。眞の信心を致します最後の目的であります。所が人間は兎角萬物の靈長たる面目に疵を付けるやうな心や行に墮り易い弱點傾向を持つてをります。それは眞實の幸福を思はず、目先の快樂に迷はされ、惡魔に誘はれて邪道に入り、幸福どころか、苦痛に悩まされ、不幸に泣くこととなつて来る。そこで日夜信心を怠らず、有難い道の光を心に受けて行けば、神様の偉大な力をお借り申して此等の邪魔物を退け眞實の愉快と幸福が段々ご得られます。人が人の資格から離れてゆくほど、不幸な事はない。例へば先祖が苦心慘愴し

て勵み働いて相當の財産を有し、旦那様よ奥様よといはれる。人が己れの不心得より、して財産を破壊したために零落れて、自分召使うて居た丁稚小僧の家に傭はれ、其の家の仕事をす。事となりたりとせんか。遺憾な事である。況んや神の分靈神の直系として吾々祖先が幾千年の昔より、生きとし生ける物に勝りて、人といふ靈妙の智を得、徳を得て、萬物の靈長といふまでに進み進んだものが、狐狸の前に平伏し拜むに至りては、全く人たる資格を失ふも甚しきもので、これより不幸はないであらう。旦那様奥様が我が召使たる丁稚小僧の家に厄介になるのは、遺憾であつても、此れは人ご人の事で、人は相身互教祖によれば相世掛世であるが、人間と禽獸とは劃然たる區別がある。そのものの前に跪き拜み頼むまでにおち

ぶれては、恥辱も此の上ない事で、返すくも不幸、不愉快、悲しき極であります。されば眞の信心をする人は人たる資格を失はず、日々に眞の道を盡して、家に功ある者となり、世の爲にも道の爲にも功ある人と呼ばれ、國の御爲に功ある人ご敬はれるに至ることを眞實の幸福と希ふべきである。かくて神に歸る其の時は、此の世にて保ち得し眞心、其の儘を清き魂と持ちつつ、此の世に於て斯く有難く尊き大道へ導かれたるそのまゝに生神教祖の御守りの御手綱に取纏りて、大祖神の御許に救ひ上げられ、生きて此の世で功人と呼ばれ、死して功の靈神と仰がれ、天地の神と共に果しなき幸福の樂みを受くべきである。生神教祖の御教に導かれて日にも夜にも眞心こめて信心を勵み、先を樂みて眞の道を行ひ、人の人たる面目

死 生 の 安 心

を 保 ち て 神 に 愛 せ ら れ 自 ら も 尊 く 世 の 人 に も 敬 は れ た ら ば、
こ れ 以 上 幸 福 な る 樂 み は 無 き も の な り と 覺 悟 す る こ そ 肝 要
と 申 す も の で あ り ま す。

「 惡 い 事 を いう て 待 な よ 先 を 樂 し め 」
之 で 此 の 席 は 終 り と 致 し ま す。 (拍 手)

講題 死生の安心

(明治四十年七月六日夜
於金光教日本橋教會所)

諸君にも引續き能く御來聽て……
今晚は御約束の通り「死生の安心」と云ふ講題によつて神語
りを致さうと思ひます。此の死生の安心と云ふことは急い
で聽かなくても宜いやうなものであります。是れほど急ぐ
べきものは無からうと思ひます。人は一寸先は闇とや申し
まして、如何にも案ずれば一寸先は闇であります。斯く本職
此所で今物を言うて居りまして、今の中物を言はないやう
になるかも知れないと云ふのが人生である。老人が先に死
ぬるのが順序なれども逆に若い人が先に死んで行くのがあ
り、老いたる者必ずしも先ならず、若き者必ずしも後ならず、老

若死に先後のないのが人生の有様である。そこで此の死に對する覺悟は老若に限らず大切な事でありませう。死生の安心を定めて居らねば、少し病ひに冒されるご早やビク／＼する。少しく人里を離れて寂しい所に到れば早やビク／＼する。

今斯く話を聞いて居る寸刻の間にも壽命は迫つてをるかも知れないと思へば、ジツとはして居られない氣持が致しませう。昨日まで無事で来た。今日も變りがない。明日も無事であらうご、日々に慣れて無頓着でをるから死ぬる用意なご要らざるやうに思ふなれども、少し思ひを廻らせば何人にも考へずにはをられぬ大切な問題で、急がずして最も急ぐべきものであらうご存じます。そこで二十五年記念布教ご致

しまして、東京市内五個所に於て開教し前後十座の終結ご致しまして、此の「死生の安心」について諸君へもお傳へ致して置かうと思ひます。

死生の安心ご申しますことは、吾々は此の世に生れて人たるの働きをなし、又人たるの交際をなしてをります。終には此の世を去り行きます。その生死を通じて心に一點の不安なき覺悟の定まることを死生の安心ご云ふのであります。此の安心ご云ふことに就ては何れの宗教ご雖も説かぬものはありませぬ。宗教ごして若し死生の安心を授けるごことが出来ない教であります。宗教ご云ふ名は、眞の宗教ご云ふ名は、冠つて居りませうが、死生の安心を得べき眞正の教理なきも

命の親様と云ふだけで生死を通じて安心の道を得ねばならぬと云ふ所まで心得て信心する者の少いのは頗る口惜しい事である。既に現世に於て命の親様と崇め奉る神様の御手綱を取外さずして死んだ後と雖も永久果なき親神様と取る所の信心をせねば信心をした所詮が無いと申さねばなりません。此の世だけが命の親様ではない、此の助けられたる神様の御懷の中に抱かれて際なく大靈驗を蒙ると言ふ所へ心を寄せて信心をせねば本當の信心と云ふことにはならないのである。故に本日「死生の安心」と云ふ題を設けまして、生神と在したる我教祖の神の導き給ふ安心についてお話し申さうと思ひます。

我教祖の神は死生の安心については最手短かく最易く神

傳へ遊ばされました。即ち

「生ても死ても天と地とは我住家と思へよ」 「天にまかせよ地にすがれよ」

是を我教祖の神の安心訓と申上げるのである。「生ても」は、吾々の父母が天地の道理に合し、母懷妊して十月が間を経て此の身體五臟六腑を整へ、人の形を備へて此の現世に生れて出で、育て上げられて人となり、此の世に於て人たるの働きをなし居るの間を「生ても」と仰せられたのである。「死ても」は此の世に於ての吾等の働きが終り、活動が止みて、體は元の土に立復り、魂は神の御許に立ち復りたる後のことを指して「死ても」と仰せられたのである。「我住家と思へよ」は、人は元來天地より出でて天地に居るので、我家の内に生れて我家に

居るご同じ意味であるから、天地を我住家と思へよご教へられたのである。「天にまかせよ地にすがれよ」は、天は神なり、神は天地金乃神様のこごなり。吾等此の世に来れるは吾が来らんごして来たのではない。又某の腹に宿り、吾何某の名を付けられて、人に生れようご所を選んで来たのではない。天ごいふ即ち神様の恵に依て吾は此の世に人ごして生れて来たのである。故に吾の此の生命は、此の肉體を去らんごする時、人力を以て止めんごしても止めるごは出来ぬ。愈々吾靈が吾身體を去らんごする時、人ごして之を止めるごは出来ぬ。即ち吾來らんごして來つた靈に非ずして、神の隨々來たものであるから、其の靈が今や神に復らんごする時は、又天命のまゝになすべきものである。即ち天にまかせ

よである。又此の形は此の世に於て土より出でて來たもので、其の働きをしたる後は元の土に立復るのであるから、地にすがれよごは申されたのである。天にまかせよごは靈魂のこごなり。地にすがれよごは肉體のこごである。此く我等は天地より出でて天地に住み、天地に働いて天地に復る。生きたも死ても此の世此のまゝが我が住家である。是れ我教祖の神の授け給ひし死生の安心訓であります。誠に簡短にして手短かい教である。此の身此の所にありて生れて來るも天地死して歸るも又天地である。天地より出でて天地の間に働き、又天地に歸る。如何でか未來を恐れ怖れて、之れが爲に心に迷を起す餘地のあるべき。眞は遠きに求めずして之れを近きに説き、難きに説かずして之れを易きに授け、吾等は此の

天地の間にありて生死共に天地の親神の氏子としてその所に安住せしめ給ふと云ふのが生神教祖の教である。今此所で眠ることも天地の親神様の懐の中である。天地の神の御恩徳の中に出で、天地の神の御恩徳の中に復るのであるから、生ても死んでも天地が吾々が住む所であるぞと教へられたのであります。この住家と云ふ御言葉を聞いて情愛深く最と安き心は致しませぬか。決して未來の事を煩ひ心配をすることは要らぬ。神の懐の中に居ると云ふはご有難いことはない。安心な事はない。斯の如く安心を得能くその覺悟が出来ますならば、何處に居て何をなすつゝあるも危ぶむ所はない。死ぬる生きるを心配の種にせずして家業を務めるのである。一寸先は闇といふが、今死しても天地乃神様の

恩愛ありがたき懐の中である。と覺悟せらるれば、その人のその信心によつて、祖先の靈神をも安心の天地に祭り替へして之を悦ばせることが出来る。親の靈神も子孫の信仰によつて浮べるといふ譯である。此に至るならば信心した所詮がある。と申すべきである。有難う存じます金光大神様、有難う存じます天地金乃神様、願ふ信心は、死生を親神様にまかせて死ぬる生きるといふ問題を離れて、腹を据ゑて願ふ信心である。眼の前に生きて斯して居る間だけの慾信心をするの。死んだ其の後までもその靈魂の行方を一切をお任せした信心と、同じく天地金乃神様助け給へと願ふに致しまして、大變な違ひである。吾自ら此の神に死生を託し、吾祖先の靈神の祭方まで生神教祖のなされ方に合せて改むるのは、卑近

な例へて云へば恰も金を借るに抵當を入れて借用すると同
じで、相方に安心がある。本より信用は貴重なるものであるけ
れど、活物は死物である、謂ゆる信用借だけでは、其の人死すれ
ば、先方へ迷惑をかける事となり、自分にも安心でない。信心
又然らんか。死生を神に預けて信心することの出来ぬもの
は、其の人死すれば其の人の信心はそれ限りとなるが「死生を
託しての信心は先の世までの安心が續く」此の身一代だけで
なく、後の世までも續く信心がしたいものであります。
さて教祖の神様の御理解の一つを此の度の布教の記念と
して御傳へして置きませう。これは教祖の神が御歸幽遊ば
さるる明治十六年の春の頃より屢々御神語りあらせられた
のである。

「生神と云うても肉體があつては不自由ぢや。肉體を隠し
たら人を助けるのに自由になる。」
此の御神語りが何と諸君のお耳に入りますか。氏子から
は生神様生神様と唱へ、天地乃神からも生神金光大神こそ
御名を賜りたるなれども、此の肉體があつてはごうも未だ廣
く自由に人を助ける譯に行かぬと仰せられたのである。人
が此所へ詣つて来て、吾が話を聞けば助りもするが、吾が前
來らねば教へて聞かすことが出来ない。それは甚だ不自由
である。此の肉體を隠したならば、金光大神の御魂は天翔り
國翔り、願ふ氏子の所に至つて助け得られるぞと云ふ御思召
である。並人が死ぬる意味とは意味が違ふ。此の御心に在し
たる生神教祖が此の世に御存生あらせられて三十有餘年の

二二六
間道を傳へさせ給ひし御時、御歸幽遊ばされて二十五年を
經たる今日を相比べて拜すれば、實に言の葉に擧げて云ふ
この出來ない程道は廣く開け御威徳が輝やいてをる。此
所で此の神語を致してをりまするにも、肉體を隠したら人を
助けるの自由になる。仰せられた其の御神意のまくに、正
に我教祖の神が今これを語らしめ給ふと思はれて、實に吾れ
ながら有難く感ぜられます。之を要するに、生きても死に
ても天地は我住家と思ひ、天にまかせ地にすがりて心安
く居れ。神より賜りし汝等が靈魂は、金光大神先に立ちて導
くぞ。汝等吾が導く此の手綱を弛めなよ。汝等が靈魂の行
方は必ず金光大神が守りてやるぞ。これが我教祖生神の御
思召であります。

二二七
そこで今一つ心に浮び出たことをお傳へ致します。こ
れも二十五年記念布教に縁のある事で、未だ世の人の多く知
らざる、範雄が見た神夢の話で、其れは明治十六年の秋、教祖の
神の御許に侍りて、道の行末の事どもを數々御傳を受けて居
りましたが、餘り長く續きましたの、何分晝夜御務の事にて、
教祖の神も少し御疲れ遊された御模様を拜しましたので、暫
し郷里へ歸らして戴きたう存じます。九月十日に教祖の
神の御前を辭して、暫時郷里に歸つて居りました。九月二十
九日の夜、神の御前の勤を終りまして、寢に就きました。所、現
在は其の御廣前たりし御家の形がなくなりまして、諸君
に物語りても甚だ耳遠い事と思ひますが、教祖の神の御家は、
御廣前として六疊御一間、人々の參拜所として十疊間、そして

御控所の間六疊と次の間とがありますが、この次の間に當る所に御机二臺を据ゑ、その真中に靈舎があつて、左右に一尺五寸位と思ひし、榊の枝に二布の垂手をつけて立てられ、教祖の神は御召物を着更へさせられて、白衣に紺の御紋付御羽織を召させられ、其の靈舎の前に御拜をなされて御靈祭を遊ばさるゝ所をあり、と拜みました。眼を醒して起座つて見ました。が如何にもあり、と拜まれる。此の時の範雄が意中は今物語ることは出来ないが、愈々教祖の神、これより御歸幽かと思ひました。此は豫て覺致してをつた事で、それより身の用意をして立出でまして、本部より西二里の六條院村に廻り、今尚ほ御存生中の金照明神に此の事を告げて御同道し、三十日の正午頃と思ふ、御廣前に参りました所、教祖の神

は二十九日の夜を以て暫く御休息と仰せられて御廣前をお退きになつてをられました。此の時御襖越しに教祖の神の御尊體に對し奉りて今生の御別れを申上げたことであり、また天地の明教を傳へさせられた教祖様は、豫て「生神と云うても肉體があつては不自由ぢや。肉體を隠したら人を助けるのに自由になる。」と宣ひし如く御尊體を隠させ給ふか。これより道は彌々榮え行くこととござりませうと、一間越の襖の蔭から御拜をして退きました。それより僅に十日を経て、即ち九月十日（陽曆十月十日）御十日は金光大神永世の祭日ぞと傳へられたる、其の御十日に御尊體を隠させ給うたのである。今金光教に於て、榊に二布の垂手をつけて靈舎の左右に立て、祀る根據は、右の次第によつて定めた譯であります。本教に於て

は畏くも教祖の神が自ら御霊神は如此祭れよと御示しあら
せられたのである事を御承知ありたい。

其の上十六年の春かたより屢々教へらるゝに、今の世の習
は、人死すれば死穢さうて神に不淨除けて神棚の前に白
紙を張るが神の氏子が死んだのに、神の前を除けて何うする
か。死んだ者はそれまでこしても、後に遣れる者は神を拜ま
すには居られまい。病人があつたら不淨中であるさうて
神を頼み拜まぬか。それでは其の人は助かるまいと諭され
た。又此方(教祖)死なば此の神の前に於て葬式をせよと屢々
御理解せられた。故に教祖の御葬儀の發棺の式は向つて廣
前の左方に御靈柩を据ゑ奉りて行はれました。又葬式に用
ふる提灯は何れでも白張であるが、此方死したる時は白張の

提灯は使ふなよ、御神燈を立てて葬りをせよと屢々仰せられ
ました。御葬儀は申しながら、教祖の神にあらせられては
愈々無形の神となり人を守らるべき御門出の祭である。故
に教祖の神の御葬式には御神燈を下ろして御葬祭を申上げ
たのであります。此の神の御前にて葬式をせよ。御神燈を
立てて送れよ。死穢の不淨中にて、後に病人がある時は神を
頼み拜まぬかこの御理解の内、如何なる御神意があるか。
之を一々解釋して御傳へせば、如何にも難有い教であるさ
悟らるゝ所がありますけれども、今席は其の暇もありませんば、
御歸幽前後の御事等は改めて御傳へする事さしておきます。
扱靈魂の行方は如此ぞ。御霊神は如此扱ふべきものぞと
知らしめ給ひて、死生の安心を傳られました。斯の道は教祖

生神として此世に在する間顯幽感通の妙理に達せられ天地
乃神と一致せられて教へ導かれたる道である。その道によ
つて安心の出來ない信者は疑の人迷の人と申すの外はない。
實に此の世に於て幾度か重ねく、に靈驗を肉體に蒙りたる
もあらん。心に蒙りたるもあらん。肉體に蒙りし靈驗は肉體
が果つれば其の儘であらう。己が心に蒙りし眞の靈驗は其
の心其の儘にして生神教祖の導かせ給ふまに、天地の祖
神様の御許へ参り安々天地の間に吾が魂鎮まるべしと覺
悟せられて信心せらるゝこそ眞の信心は申すべきである。
猶重ねて神語れば我教祖の教によれば人の死後は子孫が
親の靈神を祀れば何處にても其の祀りを悦んで享け子孫を
守る神と立つのである。子孫に非ざる者にては何々の靈神

を祀るご申せば、其の祀りを享けて守り神と立つのが金光大
神の道であるから、顯幽境を異にして而も顯幽一致である。
其れであるから、顯世に於て信心したる徳は先の世までも持
つて往けるご教へられたのである。斯の難有き御道を御開
き下されて御尊體を隠させ給ひてより正に二十五年來る十
月九日御十日が二十五年神恩拜謝の記念大祭であります。
皆々心勇しく立ち詣で、教祖の神へ拜謝の言葉を申上げられ
むごごを祈ります。是より謹で御神訓を捧讀して安心の辭
ご致します。

生ても死ても天と地とは我住家と思へよ。

天にまかせよ地にすがれよ。

續いて諸君にも御苦勞でありました。之れで本職今回の記

念布教は全く終りご致します。(拍手)

記念説教十題(終)

昭和八年九月二十五日印刷
昭和八年十月一日發行

著者兼
發行人 佐

藤 範 雄

印刷人 内

廣島縣深安郡御野村
上御領四番屋敷

田 鶴 松

印刷所

山陽新報社印刷部

岡山市西中山下一五四

發行所 財團 金

光 教 徒 社

岡 山 縣 金 光 町

終